

以下は、2018年度日本政治学会研究大会（関西大学）分科会 C-3 で、「いつまでスキナー頼みか：ケンブリッジ学派以後の政治思想史方法論」と題して研究報告をおこなうにあたり、学会に事前に提出した報告原稿である。

この報告原稿の主要部分のエッセンスは、『思想』1143号（特集「政治思想史の新しい手法」、2019年）に収録された論文「ケンブリッジ学派以後の政治思想史方法論」（pp. 5-22）として公刊された。もっとも大きな変更点は、Mark Bevir の日本語表記である。両方で重複する内容については、後者をもって確定版とする。（2025.4 記載）

いつまでスキナー頼みか：ケンブリッジ学派以後の政治思想史方法論

犬塚 元（法政大学法学部）

- 1 問題の所在
政治学の「方法論的転回」のなかの政治思想史研究 / 思想史方法論の「知の空白」 / 本稿の目的
- 2 スキナーを文脈化する (Skinner's Contextualism in Context)
モダニズムからポストモダニズムへの転向? / 行為の非因果的説明 / スキナーの変化と連続性
- 3 ポストスキナー世代の思想史方法論：2つの対照的な方向
 - 3-1 マーク・ベヴィア：「ポスト・反基礎付け主義」の思想史
『思想史のロジック』の反響 / ポスト分析的な歴史理論 / 客観主義と相対主義への両面批判 / 信念の共時的・通時的説明としての思想史研究 / 「ポスト・反基礎付け主義」の思想史研究
 - 3-2 エイドリアン・ブロー：不確実性の時代の思想史研究のハウツー
KKVのインパクト：不確実性の制御 / 「テキスト解釈の科学」 / 実践的なハウツーアプローチ
- 4 いくつかの示唆
「ポスト・ポスト実証主義」という学説史的ステージ / 「歴史研究としての政治思想史」の拡張と修正 / 方法論のコンフェッショナリズムを越えて / ハードアカデミズムの擁護

1 問題の所在

政治学の「方法論的転回」のなかの政治思想史研究

この20年で、日本語圏の政治学は大きく変貌した。そのひとつは疑いなく、方法論への関心の高まりであろう。キング、コヘイン、ヴァーバによる『社会科学のリサーチ・デザイン』（以下KKV）は、方法論を論じる際に避けて通れないどころか、政治学を学ぶにあたっての必読書とみなされつつある¹。方法論プロパーの、学部生向け教科書も登場した。方法論の修得や検討が、学のひとつの中核に位置するようになったこうした動向を、ここでは、政治学の「方法論的転回」と呼ぶことにする。

もとより、野村康が指摘するように、KKVにせよ、それに対する『社会科学の方法論争』などの批判にせよ、多くは「画一的な認識論」にもとづいており、「日本においては、存在論や認識論の違いを学ぶ機会に限られている」（野村2017: 11-12, 338）。現在の「方法論的転回」は、特定の方法的立場やその手法への関心と強く結びついており、因果、法則性、「説明」（因果解明としての説明）などの術語と親和的な動向である。しかし、この点をどう評価するにせよ、こうした「方法論的転回」が、研究の大きな推進力となってきた側面は否定できない。

ひろく政治学のなかの歴史研究に目を向ければ、こうした「方法論的転回」にレスポンス的な動向もある。たとえば保城広至は、歴史学から中範囲の理論を導くことは可能との見地から、個性記述的な歴史学と法則定立的な社会科学の架橋を試みた（保城2015）。言ってみればこれは、歴史研究を「方法論的転回」の動向のなかに組み込もうとする試みである。他方、政治学のなかの思想研究に目を向ければ、この20年のあいだに、政治理論・政治哲学というサブディシプリンが政治思想史からの分離に成功し、その過程を通じて、方法論とアイデンティティについて自己省察を深めている（井上・田村2014、松元2015など）。

ところが、歴史研究でも思想研究でもある政治思想史研究の現状に注目してみると、こうした動向とは対照的に、方法論の検討は、近年たいへんに乏しい。日本語圏では、政治思想史方法論の検討は、おおよそ

*コメントを歓迎します (inuzuka@hosei.ac.jp)。本稿は未定稿ですが、研究ルールに従った引用・言及を歓迎します。

¹ なお、KKV（英語原著）の表紙をずっと飾ってきたのは、カンディンスキーのWhite Center（1921）である。面白いことに、日本語圏の政治思想史研究でカンディンスキーを表紙とする書籍としてひろく知られてきたのは、KKVの対蹠にあるとも言える小野1996であった（White Dot（1923））。

1990年代半ば以降20年ほど停滞しており、大きな「知の空白」が存在しているとすら言うことができる。

かつてわたしは、政治理論・政治哲学の方法論的進展にこと寄せて、政治思想史研究においても「エッセイからの脱却」が必要ではないか、もうすこし方法論的自己検討が必要ではないか、といくつかの機会に論じたところ²、少なくない反論や反発・揶揄を得た。しかしこの小さな論争も、これまでのところは、方法論の学問的検討に結びついてきたわけではない。「方法論的転回」のなかでは、こうした状況にある政治思想史を、政治学の教育や研究から除外する、「政治思想史外し」と表現できるような動向も観察できる³。

思想史方法論の「知の空白」

ケンブリッジ学派（政治思想史方法論におけるケンブリッジ学派）の中心に位置するとされるクエンティン・スキナー（Quentin Skinner, 1940-）が、方法論を精力的に発表したのは1960年代後半から1970年代半ばである。それが惹起した論争をふまえながら、彼の主要な方法論論文が『意味とコンテキスト（日本語版書名：思想史とはなにか）』としてまとめられたのは1988年である。

スキナーの方法論について日本語圏では、佐々木毅の書評論文（1981）を嚆矢に、『意味とコンテキスト』の翻訳（1990）に前後して、半澤孝麿、佐藤正志、塚田富治、関口正司らの論文が1990年代半ばまでに相次いで公刊されている⁴。これらの業績を後知恵でいまから振り返れば、1）佐々木の問題設定や批判がよくも悪くも議論の枠組みを規定しているとともに、2）スキナーの方法論の学問史的・思想的検討においてかならずしも十分でなかったと評価できるが、しかし、3）これらはほとんどタイムラグなく方法論の新しい動向の詳細な紹介や内面的検討をおこなうものであった。

ところがそれ以降、思想史方法論は停滞する。スキナーのその後の変転や「転向」、スキナーらケンブリッジ学派をめぐる分析の蓄積、あるいはポストスキナー世代の動向をきちんとフォローし、それをふまえて思想史方法論を論じる試みは見当たらない。もとより、思想史方法論をめぐる研究そのものが消えたという表現は不適切であるが⁵、英語圏での論争に勝利を収めて政治思想史方法論において主導的地位を得たと評されている⁶ケンブリッジ学派の方法論についてみれば、およそ20年にわたって、ほとんど知識と理解が更新されないままの「知の空白」が続いている、と評価しても誇張ではない。たとえば、スキナーはポストモダニズムに「転向」したか否かという大きく話題となった争点は、日本語圏ではほとんど知られていない⁷。こうした「知の空白」のもと、思想史方法論をめぐるのは現在に至るまで、1）スキナーは歴史研究を志向し、テキストをコンテキストに位置づけるべきと主張した、2）方法論としてはスキナー的文脈主義のほかにも、シュトラウス学派、解釈学、概念史、ポストモダニズムなどのさまざまなアプローチがあり相互に対立している⁸、という図式的理解が、いつまでも刷新されないままに学界で継承されている。

もとより、方法論をめぐる「知の空白」は、かならずしも政治思想史研究者の怠慢を意味するわけではない。方法論をめぐる現状を確認するためにも、ごく簡単に、20年あまりの「知の空白」を生み出したと思われる原因を仮説的に3つ指摘しておきたい。

² そのうち文書として残るのは大塚2014。なお、「エッセイ」をめぐるのはグロッドほか1999=2003を参照。

³ 最近の有力な2つの教科書『政治学の第一歩』、『ここから始める政治理論』にもそうした動向を観察できる（伊藤ほか2016、田村ほか2017: ii, 10-11）。もっとも、思想史研究を政治学から排除しようとする試みは、新しい現象ではない。1954年のAPSRに掲載された論文「資本論と吹き出物：古典の再検討」は、古典的テキストを扱う10のアプローチのうち9つは、歴史学・思想史的、伝記的、哲学的であり、現代の政治行動の説明に寄与しないと主張した（Hacker 1954; Richter 2009: 12-26）。

⁴ 佐々木1981、半澤1988、1990、佐藤1990、塚田1994、関口1995。これらの延長上に位置づけられるものとして堤林1999、2000、関口2015。そのほかポーコックを含むケンブリッジ学派を論じたものには、『思想』1007号・1117号（2008、2017）、森2002、安武2014などがある。

⁵ たとえば、シュトラウスの方法論について飯島昇藏、石崎嘉彦、西永亮、近藤和貴（さらに雑誌『政治哲学』、解釈学の方法論について加藤哲理の仕事などがある。近年では、政治思想学会の研究大会・学会誌でも方法論が特集された（2016、2017）。

⁶ Whatmore 2015: ii, 11; Blau 2017: 245。ワットモアの著書は、『思想史 intellectual history とはなにか』という表題のもとに、もっぱらケンブリッジ学派だけを論じる。同学派の方法論は一般化したので、もはやその呼称は不要である、というのが彼の理解である。

⁷ ほとんど唯一の例外は関口2015であり、わずかではあるが、ポスト構造主義に対するスキナーの態度に言及がある。

⁸ ただし、思想史方法論を論じる場合に、さまざまなアプローチを並記するのは日本語圏に限られない。たとえば『オックスフォード政治哲学史ハンドブック』（2011）では、第1章から順に、文脈主義、シュトラウスアプローチ、ポストモダンアプローチが並記されて、第4章では順に、「永遠の問題」アプローチ、マルクス主義、起源探しアプローチ、シュトラウス主義、精神分析、フェミニズム、ポストモダニズム、ケンブリッジ学派が説明される（Klosko 2011）。

第1は、スキナーやケンブリッジ学派の思想史方法論が魅力を欠き、研究者の積極的な関心を惹かなかった可能性である。1) スキナーの方法論はあたりまえのことで、陳腐であるという理解がある。小野紀明の証言はその一例である⁹。たしかに英米圏においても、それは厳密な方法論としてではなく、コンテキストに注目してアナクロニズムを警戒すべきという一般的なアドバイスとして受容されることがほとんどだった (Koikkalainen 2011: 321; Bevir 2011b; Lamb 2016: 76)。2) スキナーの方法論は実際の解釈には役に立たず無益、3) そもそも方法論は不要、という立場もある。方法の是非はアウトプットを通じて測定すべきであり、方法論のための方法論は不要、という見解はそうした立場のひとつである。ケンブリッジでスキナーの同僚であったイシュトヴァン・ホントは、「方法論は愚か者のためのもの」と語ったとされる (Whatmore 2016: 10)。4) スキナーの方法論は、思想史研究の有意性や自由な創造性を奪うという意味で有害とみなす立場もあるだろう。

「知の空白」を生み出した第2の理由として考えられるのは、20世紀思想の展開に由来する相対主義的な視点である。

言語論的転回、ポストモダニズム、反基礎付け主義、ポスト構造主義など、さまざまな領域でさまざまな術語で表現される、20世紀における認識論上の転換は、普遍的真理を客観的に明らかにできるという素朴な客観主義・普遍主義・実証主義を退けた。そうした転換を歴史学・歴史研究で担ったひとつは、ダントーやホワイトらの、物語りの歴史理論である。「事実はなく解釈のみ」(ニーチェ『権力への意志』)というフレーズに象徴される、こうした認識論上の転換は、テキストはさまざまに解釈できる、歴史はさまざまに叙述できるという相対主義や、正しいテキスト解釈・歴史叙述は存在しない、という懐疑主義を生み出した。こうした認識論的観点を採るならば、正しいテキスト理解をめざす方法論に懐疑的になるのは不思議ではない。あるいは、著者の特権性を否定した受容理論などのポストモダニズムの動向は、著者の脱中心化、テキストの脱文脈化を推進して、ケンブリッジ学派の前提を揺るがせた (ブレット 2002=2005)。

ひとつの典型は、徹底した反基礎付け主義者、歴史主義的ノミナリストであるリチャード・ローティであろう。ローティが、テキスト解釈における「合理的再構成」と「歴史的再構成」を区別したことはよく知られているが、彼がこの議論を通じて語っているのは、この2つの違いは、われわれがテキストに何を求めて、どのコンテキストに位置づけるかの違いにすぎないという点であった。ローティによれば、テキストに「正しい記述」があるという考えは誤りで、われわれは目的に応じて、さまざまなコンテキストに位置づけてテキストを記述しなおすことができるし、それらの再記述の優劣を横断的に判断する規準はない (ローティ 1984=1999: 115-118; 1989=2000: 166-167, 203; 1992=2013)。

「知の空白」を生み出した第3の理由として可能性があるのは、方法論を語る際に付随しがちな党派性(そしてそれに対する忌避感)である。たとえば、実質的な検討も欠いたままに、「〇〇は、スキナリアン(シュトラウシアン、歴史派、エッセイ派)だから××」という判定が下されるならば、方法論をめぐる学問的検討や対話は妨げられるであろう。

本稿の目的

政治学の「方法論的転回」のなか、政治思想史研究はどうあるべきだろうか。

ひとつには、因果法則に従う経験的世界とは別の観点をいなければ、政治学が論ずべき自由や道徳について議論はできないというカント的立場から、現在の「方法論的転回」について論じることかもしれない。しかしここでは別の方針を採り、学問史的・思想史のアプローチから問題に接近してみたい。

本稿はまず第1に、思想史方法論をめぐる「知の空白」の克服を目的とする。

ここではそのために大きく分けて2つの作業をおこなう。1) まずは、スキナーの思想史方法論の歴史的な文脈化である。それはスキナーの思想史方法論を、現代に至るまでの変遷や、それについての研究成果も丁寧に辿りながら、学問史的・思想史的に位置づける作業である。現在の「方法論的転回」がいずれなされる

⁹ 「大体、思想家の言説の真の意味を、それが発せられた状況の文脈(コンテキスト)の下に理解せねばならないなどということは、いやしくも思想史を学ぶ者にとってのイロハであろう」(小野 1988: 393)。

のと同じように、本稿では、スキナーの方法論に学問史的・思想史的な文脈を与えて、歴史的な相対化を試みる。手始めに検討するのは、スキナーの方法論は実証主義的・近代主義的であったか、スキナーはその後にはポストモダニズムに「転向」したのか、という問いである。

2) 2つめの作業は、ポストスキナー世代の政治思想史方法論の解明である。本稿は、ポストスキナー世代の、対照的な2つの方法論に焦点を合わせる。ひとつはきわめて哲学的、もうひとつはきわめて実践的な方法論である。スキナーの次の世代は、スキナーと同じように歴史研究としての思想史研究をめざしているのだろうか。あるいは、ポストスキナー世代は、ポストモダニズムがもたらした相対主義・懐疑主義をどのように受けとめ、どのように応答しているのだろうか。(ここでは、ポストスキナー世代に注目する手法を採り、ポストシュトラウス、ポストコゼレック、ポストデリダなどは扱わない。)

こうした学問史的・思想史的分析ののち、本稿は第2に、それらの示唆をふまえながら、現在において思想史方法論としてなにを論じるか、なにを論ずべきかを検討してみたい。

現在のアカデミズムの実際の営みを前提とするかぎり、テキスト解釈はけっして「なんでもあり」ではなく、よい解釈と悪い解釈を判別することは不可能でも不要でもない(テキスト解釈をめぐる相対主義・懐疑主義は全面的には支持できない)というのが本稿の立場である。われわれは、日々の研究、査読などのピアレビュー、学位審査・業績審査などにおいて、テキスト解釈のよい・悪いを判定する作業を個人として、集団としておこなっている。(査読やピアレビューの制度は、共通の規準に従ってよい研究と悪い研究を判別できるとする方法論的前提に立脚している)。

もちろん、そのうえで実質的に問われるべきは、よい研究と悪い研究を判別する間主観的な規準はどのようなものか、という問いである。この点に関し、テキスト解釈にあたってなにをなすべきか、なにをなすべきでないか、解釈を正当化するための方法や手続はどのようなものか、という方法論的問いに注目することで、判別規準をいま以上に特定して言説化できるのではないか、というのが本稿の問題関心である。

よい研究・悪い研究の判別規準をより明確にすることが望ましいという方法論上の要請は、近年の研究環境の変化によって、さらに強まっているのではないだろうか。査読制度がさらに普及しているという制度上の変化のほかにも、思想史研究の場合には、デジタルデータ、デジタルツールの普及が重要である。現在では、大量のデジタルデータ(たとえばEEBOのようなデータベース)を利用し、デジタルツール(たとえば検索機能やKH Coderのようなソフトウェア)を用いることで簡単に、分析らしきもの、論文らしきものをもっともらしく作成することが可能となってきた。こうした新しい研究環境のもとでは今まで以上に、なにをなすべきで、なにをなすべきでないかの規準を明確にすることが求められているのではないか¹⁰。「知の空白」を脱する作業は、そうした方法論上の再検討の第1歩となるはずである。

* 術語についての補足

本稿では、「方法論」「リサーチデザイン」「方法(手法)」の定義や区別について、野村2017に従う。方法論とは、「認識論的立場の違いに沿って、手法やリサーチ・デザインの活用について理論的指針を提供するもの」、ないし存在論や認識論を手法やリサーチ・デザインへと結びつけていくロジックである。リサーチデザインとは、「研究の問い(リサーチ・クエスチョン)に対する答えを導き出すために、(複数の)手法を方向付けて、得られる知見を一般化する道筋を示し、研究を論理的に形作るもの」である(野村2017:2-3, 10-12)。

以下の術語については、基本的にはそれを用いる理論家の定義をそのまま援用するが、便宜のために簡単に以下におおよその意味内容を記す。「基礎付け主義」は、なんらかの確実なもの(たとえば真実、与件とされる経験的データ)によって、真理性(知識)や合理性を根拠付けることが必要・可能であるとみなす、

¹⁰ デジタル時代における思想史研究の現状と課題については、別学会で論じたことがある(「データフィクションの時代における思想・哲学研究: デジタルデータ、デジタルツール(検索、計量分析)をどう活用できるか」、日本イギリス哲学会研究大会、2018年3月)。関連してここで、「計量テキスト分析」(内容分析、テキストマイニング)の手法について簡単に言及しておく。現段階において「計量テキスト分析」は、テキストを単語(正確には形態素)に分解して、その出現頻度や共起を定量的に計測して統計学的に処理することを通じ、テキストの特徴を明らかにしようとする手法である。それは、特定の研究課題(たとえばオーサーシップや執筆年代の特定)に強みをもつが、これまでにテキスト解釈や思想史研究が担ってきた分析のすべてをカバーするには至っていない。今井耕介が指摘するように、文法や語順を無視した「単語の袋の仮定」のもとでの、頻度や共起の分析では、「テキストの繊細な意味が発見されることはおそくない」(今井2017=2018: 263)。テキストの前処理などで、分析者の判断に依存する部分も多い。

存在論-認識論上の立場である。「反基礎付け主義」（あるいは「ポスト基礎付け主義」）は、基礎付け主義を否定する立場。「全体論（ホーリズム）」は、本稿では認識論的・意味論的なそれを意味し、個々の真理性や合理性について、単体での基礎付け主義的な根拠付けは不可能であり、全体（パラダイム、コンテキスト）との関連のなかでしか確定できないとする、反基礎付け主義的・文脈主義的な、存在論-認識論上の立場である。

「実証主義」は、基礎付け主義にもとづいて経験的事実に立脚する認識論上の立場であり、本稿（本稿が記述対象とする理論家）においてはさらに、人間や社会の「説明」を因果関係の記述を与えることと等置する方法論的立場を意味する。本稿に登場する実証主義は、「自然主義」や「経験主義」とほぼ互換的である。

「ポスト構造主義」は、スキナーやベヴィアにおいては、「ポスト基礎付け主義」とほぼ互換的にゆるやかに用いられる、存在論-認識論上の立場を示す術語である。「近代主義（モダニズム）」はベヴィアの記述において、基礎付け主義、実証主義、経験主義の総称として用いられる。「ポストモダニズム」は、スキナーの記述において、反基礎付け主義、ポスト構造主義のみならず、ひろく非実証主義的な潮流（たとえば解釈学）も包摂するゆるやかな術語である。「分析哲学」は、言語批判を中心的な手法にして、厳密で明晰な分析をめざす 20 世紀以降の哲学的系譜を意味する。「歴史主義」は、歴史的変化を根拠とする反普遍主義の立場であり、本稿（本稿が記述対象とする理論家）では、（進歩史観のような）歴史的変化をめぐる目的論的な想定、あるいは（唯物史観のような）歴史的変化についての還元主義的な想定は含まれない。history of thought、history of ideas、intellectual history は（スキナーがラヴジョイに言及する場合を除き）ニュアンスの違いはあれどすべてが「思想史」と翻訳可能な概念であり、本稿でも煩雑を避けるために区別しない。

2 スキナーを文脈化する（Skinner's Contextualism in Context）

モダニズムからポストモダニズムへの転向？

スキナーは、それまでの主要論文を 2002 年に『政治のヴィジョン』（全 3 巻）にまとめ、第 1 巻に方法論の論文を再録した。ところが、再録にあたってスキナーは各論文を大幅に修正し、しかも修正箇所を明記しない方針を採った。修正はきわめて多いので、対照作業にはとても面倒な手間を要する。

こうした編集方針は、当然ながら批判に晒された。たとえば、デイヴィッド・ウートンは、「脱構築主義の隆盛」のなかでスキナーがそれに適うように「事後的な合理化」をめざしていると捉えたとて、これを「革命の終焉」と呼んで揶揄した。これらの事後訂正は、「新しい正統」たるスキナー的文脈主義が勝利し、方法論のパラダイムシフトが完了したことをなにより示しているというのである（Wootton 2003）。

ここには、スキナーは、時流にあわせて議論を都合良く修正したとの含みがある。実際、テキストの語彙には、明確な変化を観察できる。明らかにスキナーは、ポストモダニズムやポスト構造主義に接近している。たとえば、コンテキストのなかで著者の意図（発語内行為）を解明しようとした自らの方法は、「より流行に即して語れば」、テキストを「間テキスト的」に取り扱って、テキストの「遂行性 performativity」に着目するアプローチであるというのである（Skinner 2002: viii）。

さらにスキナーは、自らの思想史方法論を、「ポスト経験主義」「ポスト分析哲学」「全体論（ホーリズム）」という術語で形容している。それは、「ありのままの事実」によって知や意味を基礎付けできるとする認識論・知識論を否定し、全体のコンテキストとの関連のなかでしか真偽や意味を問えないとする、「意味と知のポスト経験主義的理論」である。スキナーによれば、自らの思想史方法論には「クワイン、デイヴィッドソン、そしてとくに後期ヴィトゲンシュタインの哲学に見られるタイプの全体論（ホーリズム）」の受容が反映しており、「ポスト分析哲学におけるこの [全体論の] 動向は、テキスト解釈や概念変容の研究にとって有意で重要である、と示すことがわたしの主要な願いのひとつである」（Skinner 2002: 4-5）。

スキナーのこうした変化をモダニズムからポストモダニズムへの転向とみなす理解がある。われわれが次章で詳しく取り上げるマーク・ベヴィアが、そうした理解の代表である。

ベヴィアはスキナーの変化を、「近代主義的・実証主義的」な歴史主義から、「ポスト分析的」¹¹歴史主義への転向とみなす。ベヴィアによれば、フィルマーやロックをめぐる経験的な思想史研究や歴史人口学の

¹¹ 後述のように、ベヴィアが用いる「ポスト分析的」とは、クワインが分析的／総合的の二分法を批判したのちの段階の（ポスト実証主義的・反基礎付け主義的な）分析哲学を形容するラベルである。それはあくまで分析哲学であることから、ベヴィアはしばしば「(ポスト) 分析的」と表記する。

実証研究で知られるピーター・ラスレットが、論理実証主義やライルやウェルドンの言語分析を導入することで政治思想史研究にもたらした近代主義（実証主義・経験主義）は、「正しい方法を採用すれば妥当・信頼できる結論が導かれる」という方法論への信頼とともに、そのまま、ケンブリッジ学派の文脈主義・歴史主義的思想史方法論に継承された。ところがスキナーはそののち、説明もないままに「意味論の全体論」、「反基礎付け主義」、「ポスト分析的解釈学」の語彙を用いるように変容した (Bevir 2009; 2011b; Skodo 2009)。スキナーのこの変化を「反基礎付け主義的転回」と呼ぶ解釈もある (Lamb 2009)。あるいは、政治思想史研究を歴史研究として純化しようと試みたスキナーやケンブリッジ学派の思想史方法論は、以前からしばしば、(批判的な含意をこめて) 実証主義的であると評価されてきた¹²。

以上は、スキナーの思想史方法論の理解として妥当だろうか。その妥当性を検証するためには、1960-70年代に続けて発表されたスキナーの方法論の原型と、それ以後のスキナーの方法論をそれぞれ緻密に再確認する作業が必要である。

行為の非因果的説明

よく知られているように、スキナーの思想史方法論のもっとも基本的な立場は、第1に、「すべては個別的な問いに対する個別的な答えである」としたコリングウッドを継承する歴史主義・反普遍主義、第2に、歴史的説明における反還元主義、とまとめることができる。それぞれがラヴジョイの觀念史、マクファーソンのマルクス主義的解釈の批判を意図していたこともよく知られている。

ところが、スキナーの方法論が、人文社会科学における因果的説明（因果解明としての「説明」）の妥当性をめぐる同時代の激しい方法論論争を主たる背景としていたことは、なぜか見失われがちである¹³。それは、行為を説明するとは、行為に因果的説明を与えることである、とする実証主義（自然主義）の是非をめぐっての論争である（スキナーも含めて論争当事者は、実証主義の方法論的立場をしばしば自然主義と呼ぶ）。今日の人文社会科学においても依然として、「説明」とは因果解明か、記述か、解釈かをめぐって激しい方法論的対立があるが（保城 2015: 48-66）、スキナーは、まさしく因果的説明をめぐる方法論論争につき関心を持ち、それをよく学び、そして、この論争に対する応答として自らの思想史方法論を提示している。こうした歴史的な文脈は、スキナーの思想史方法論の重要な特質を明らかにするはずである。

1) 「思想史における意味と理解」(1969)

スキナーの方法論の論文のうち、もっとも有名でよく言及されるのは、「思想史における意味と理解」(1969)である。それは冒頭に明示されるように、テキスト主義とコンテキスト主義をどちらも批判した。

スキナーやケンブリッジ学派の思想史方法論は、しばしばコンテキスト主義（文脈主義）と呼ばれるが、関口正司が強調してきたように、厳密に言えばこれは不正確である。スキナーは、第1に、社会的文脈によってテキストを説明する、マルクス主義やネーミア主義のような還元主義的な「コンテキスト主義方法論」を退け、第2には、政治的・社会的文脈一般ではなく「言語的コンテキスト linguistic context」（のちには言語慣習 convention と表現される）を重視したからである。

われわれが注目すべきは、この論文におけるコンテキスト還元主義批判の実質的な中味である。スキナーは、コンテキストを決定因とみなす還元主義の誤りを指摘するだけでなく、よりひろく、テキスト・言語行為の説明は、因果的説明に還元できるかどうかを問う。コンテキスト還元主義が、「意図にもとづく行為は、因果的説明の通常過程によって説明されるべきであるという、より一般的で、ますます受容されつつある仮説」（スキナー1990: 105=Skinner 1988: 59）¹⁴に依拠して語られるからである。この箇所の注では、そうした自然主義の立場として、デイヴィドソン、エイヤー、マッキンタイアの名前が挙げられている。

¹² 佐々木 1981: 128; Keane 1988: 210 など。近年では加藤哲理が、ケンブリッジ学派の政治思想史研究について、「歴史を客体として措定した後に、科学的方法をもって過去の事実を客観的に把握しようとする歴史学」を志向していると指摘している（加藤 2017: 31）。

¹³ 日本語圏では佐々木 1981: 126 のほか、佐藤 1990 がこの点に注目している。直近では古田拓也の学会報告「ネオ・ローマ的自由の何が間違っているか」（政治思想学会、2018年5月、未公開）でも指摘がなされた。

¹⁴ 本稿では日本語訳の引用にあたって訳を改めた場合がある。

英語圏の「行為の哲学」(行為論)において、デイヴィッドソンが行為の因果説の代表であるとすれば、それを批判した反因果説の代表は、アンスコムである(古田 2013: 136)。スキナーがここで、因果的説明によって行為を説明できるかという問いを論じるのにあたって依拠しているのは、まさしくそのアンスコムの『インテンション』である。そのうえで、スキナーは因果説批判の立場から、行為を説明するためには、原因とは別に明らかにするものがあると論じる。行為を理解するためには、行為主体がその行為をおこなったねらい・意図を把握する必要がある、これは原因とは区別される、というのである。

すなわち、言語行為を理解しようとする場合には、その言語行為をもたらしめた原因としての意図(intentions to do X)だけでなく、その言語行為のねらいという意味での意図(その言語行為において伝達しようとした意図、intention in doing X)を把握する必要がある。警官がスケーターに対して「向こうの氷はとても薄いですよ」と語るとき、そのねらいはスケーターへの警告である。警官の言語行為を説明するためには、この意図(警告という意図)を把握することが必要であるが、この意味における意図は、行為に先行する動機や意図(たとえば、自分の管区で事件を起こしてほしくないという欲求)、あるいは発言の言葉の意味(氷が物理的に薄いこと)とは区別される¹⁵。このようにしてスキナーは、行為の原因とは区別される、行為の意図を明らかにする営みも、行為の「説明」であると主張する。

ここからはよく知られた議論である。スキナーはこの意味における意図(ねらい)を論じるにあたって、オースティンから「意図された発語内的力 intended illocutionary force」の概念を借用し、さらに、それを知るためには「言語的コンテキスト」を明らかにする必要があると主張する(スキナー1990: 103-114=Skinner 1988: 58-64)。

続く1972年の論文「動機、意図、テキストの解釈」も骨子は以上と基本的に同一であり、アンスコムの意図分析に依拠しながら、動機(行為を生み出した動機)と意図(行為のねらい)を区別し、後者を説明するにあたってオースティンの「発語内行為」概念を援用している。そして、こうした著者の意図の再現こそが、テキスト解釈の必要条件であるというのである(スキナー1990: 153-160=Skinner 1988: 73-77)。

2) 「社会的意味」と社会的行為の説明(1972)

ところがスキナーは発表直後から、「思想史における意味と理解」のコンテキスト主義批判(とくにオースティンの援用)に不満であった。「すぐに再挑戦することを決めて」執筆されたのが、1972年の「社会的意味」と社会的行為の説明である(スキナー1990: 220-221=Skinner 1988: 103; Skinner 2002: 4)¹⁶。

しかし、行為の非因果的説明の妥当性を示すという方法論的関心のもとに思想史方法論を論じるという点では、この論文も、「思想史における意味と理解」と同じである。論文冒頭に示されるように、「社会的行為は、因果的説明の通常過程によって十分に説明できるとする自然主義的命題をめぐって、それを肯定しようとする哲学者と、否定しようとする哲学者のあいだでずっとおこなわれてきた論争」(スキナー1990: 171=Skinner 1988: 79)こそが、この論文でもスキナーが応答しようとしている文脈である¹⁷。

この論文はそれまでの論文と比べ、1) 行為の因果的説明と非因果的説明の対抗関係を、実証主義と反実証主義の対抗関係として明示するとともに、2) スキナー自身は、そのいずれからも距離を置いて、実証主義ではないがそれと両立しうるかたちの、行為の「説明」モデルを提示した、という2点に特徴がある。

スキナーは、行為の因果的説明を説く実証主義の系譜にデュルケーム、ヘンペル、エイヤーを挙げ、他方で反実証主義について、行為の「意味」を重視して、動機から行為を非因果的に説明することによって行為

¹⁵ この警官の言語行為の事例は、1972年の論文から用いられているが(スキナー1990: 179=Skinner 1988: 83-84)、ストローソンからの借用である(Koikkalainen 2011: 318; Whatmore 2016: 51)。

¹⁶ 「思想史における意味と理解」のコンテキスト主義批判は、『政治のヴィジョン』(2002)では削除されている。

¹⁷ スキナーは1988年にこの論文を以下のように回顧している。「行為の非因果的説明をめぐって当時激しくなされていた論争に、この議論[発語内行為の再記述としての説明]は有意であるという点こそ、この議論を最初にしたときの私の関心のひとつだった。ヴィトゲンシュタインの弟子たちのなかには、動機は行為を説明するが、動機は行為の原因ではないから、行為の非因果的説明は可能であると主張する人々がいた。これに対する批判者のなかには、動機による説明は実際には因果的説明であるといって反論し、行為の非因果的説明は存在しえないと推論する人々がいた。私が論じようとしたのは、たとえ動機が行為の原因だとしても、それにもかかわらず行為の非因果的説明が存在しうることを言語行為論は示唆している、という点だった。」(スキナー1990: 324-325=Skinner 1988: 266)

の「理解」をめざす系譜としたうえで、ディルタイ、コリングウッド、ウェーバー、ヴィトゲンシュタインの名前を挙げている（スキナー1990: 171-177=Skinner 1988: 79-83）。

スキナー自身の議論の骨格は、ここでも基本的には以前と同じである。つまり、行為における著者の意図を解明すること（言語行為の場合には発語内行為の再記述）は、当該行為の意味を明らかにすることで、その行為を「説明」する。「向こうの氷はとても薄いですよ」は、警告を意図していると明らかにすることは、その言語行為の意味を明らかにして行為を「説明」する、というのである。

これは、行為の非因果的説明を提供するという点では実証主義批判であるが、他方、（反実証主義が強調していた）行為の動機ではなくそれとは区別される意図に注目し、しかも、「因果的説明をその後で与えること」を排除せずに実証主義と両立可能である、という点で、反実証主義の立場とも異なる（スキナー1990: 171-190=Skinner 1988: 79-90）。こうした方法論的立場は、実証主義では不十分としながらも反実証主義に与しないスタンスであり、その意味で、実証主義でも反実証主義でもない「ポスト実証主義」と表現できるだろう¹⁸。

3) 「歴史的説明の限界」(1966)

スキナーの思想史方法論の基底には、行為の非因果的説明のありかたを探求する、「ポスト実証主義的」な方法論的関心が存在していた。このことは、さらに、彼の最初の方法論論文からも明らかである。26才のスキナーが1966年に公刊した「歴史的説明の限界」(『意味とコンテキスト』に未収録)である¹⁹。

論文タイトルは、おそらくは、コリングウッドの論文(「歴史的知識の限界」1928)を意識したものである。タイトルのうち「説明」は因果的説明を意味しており、タイトルを言い直せば「歴史学における因果的説明の限界」となる。やはり、実証主義の因果的説明の妥当性の検討が、論文のテーマである。

スキナーは、ここでその代替を探求する。スキナーによれば、歴史学における説明を、科学的説明と同じ因果的説明とみなす実証主義(ヘンペルやポパー)はすでにこれまでに十分に批判されてきたが、ところが、あるべき「歴史的説明」がどのようなものかについて哲学的な代替が示されていない。スキナーがこの論文で検討しているのは、実証主義の次の段階の方法論のありかたである。

スキナーは、影響関係——たとえば、思想家P₁と思想家P₂の影響関係——をどのように説明できるかを問う。スキナーによれば、P₂の側の証言も、P₁とP₂の思想の共通性も、両者の影響関係を説明するには不十分であり(紙幅の都合で詳細は割愛)、ここにおいて歴史家がなすべき「歴史的説明」とは、P₁とP₂をどちらも位置づけられるような、複雑な歴史的状況のマトリックス(コンテキスト)をできるかぎり十分に「記述」することである。こうした「記述」としての非因果的説明は、因果的説明を排除せず、それとも両立する(Skinner 1966: 199-212)。1) スキナーは、人文社会科学における因果的説明の妥当性をめぐる論争を文脈として自らの方法論を検討している。2) スキナーは、実証主義の因果的説明に代わる別様の非因果的「説明」を模索している。3) スキナーの提示する非因果的説明は、因果的説明を排除せずにそれとも両立可能である。この3点において最初の方法論論文は、1969年、1972年の論文とまったく同じである。

1960年代、70年代のスキナーの思想史方法論について小括しておこう。

スキナーは、コリングウッドの方法論的立場を継承して、テキストの歴史性を重視する。歴史認識におけるこうした「ノミナリズム」(スキナー1990: 358=Skinner 1988: 28)の立場のもとでは、テキストは、「永遠の問い」への回答でなく、「特定の問題の解決に向けられた、特定の機会における、特定の意図の具体的な表現」(スキナー1990: 98, 115-116=Skinner 1988: 56, 65)である。テキストの歴史的な意味を明らかにすることは、著者の意図(ねらいとしての意味の意図)を明らかにすることであり、そのために、まずはテキスト

¹⁸ こうした立ち位置は、論文後半でも共通している。スキナーは、信念 belief の合理性をめぐっての、「実証主義的知識論」(正当な根拠に基礎付けられていることをもって信念の合理性を定義する立場)と「反実証主義的異議」のあいだの論争について、やはり折衷的なスタンスを採用している。スキナーはこのなかで、反実証主義の側の主張が、「分析的命題と総合的命題の区別に対するクワインの批判」をひとつの根拠としていることを指摘している(スキナー1990: 192-198=Skinner 1988: 91-94)。

¹⁹ 日本語圏では、佐藤1990: 121-123がこの論文を詳しく紹介している。

を言説的コンテクストに位置付けることが必要となる。ただし、スキナーはコンテクスト還元主義ではなく、主体性（エージェンシー）と言語的コンテクストのいずれにも注目し²⁰、著者の信念や動機にも目配りする²¹。

しかし、スキナーの思想史方法論を、哲学か歴史か（「永遠の問い」か「個々の問い」か）という対抗軸の次元で理解するだけでは表層的である。スキナーの思想史方法論の根底には、人文社会科学に因果的説明を導入した当時の実証主義に代わるオールタナティブを探究する、「ポスト実証主義的」な問題関心が存在した。その意味でもスキナーは、「近年のイングランド哲学における主導的な反実証主義的観念論者」（スキナー1990: 219-220=Skinner 1988:103）であったコリングウッドの継承者である。スキナーの思想史方法論を「実証主義的」「近代主義的」とするのは明らかに一面的な評価である²²。

同時に重要なのは、スキナーがどのような知的リソースに依拠していたかという点である。

因果的説明をめぐる論争に関心を向けたスキナーが参照したのは、具体的には、論理実証主義（エイヤー、ヘンペル）、反基礎付け主義・全体論（後期ヴィトゲンシュタイン、クワイン）、言語哲学（オースティン）²³、「行為の哲学」（デイヴィドソン、アンスコム）であり、こうしたスキナーの主たる知的リソースを分析哲学と総称しても不適切ではなかろう（Richter 1990: 51-53; Skodo 2013）。これは、実証主義から反実証主義・全体論までをスペクトラムに含む非一元的な知的動向であるが、スキナーが、分析哲学のなかにポスト実証主義的な動向を見出して、それに大きく依拠していたこともここまでの分析から明らかである。スキナーはこの動向を、「近年の分析哲学における、経験主義と実証主義からの一般的な撤退」や「ポスト経験主義的な哲学的発展」と表現している（Skinner 1975: 209, 211）²⁴。

スキナーの変化と連続性

では、1980年代以降のスキナーの思想史方法論はどうだろうか。変化は間違いなく観察できる。ここでは、「ポスト構造主義」の術語を用いるようになったこと以外の、3つの変化をごく簡単に確認しておこう。

1) 「系譜学的転回」

第1は、「系譜学的転回」（Lane 2012; Lamb 2016）と表現される変化である。これは、テキストの歴史性を重視するスキナーの方法は、政治思想史研究の有意性を損ねるという（当初から現在に至るまでよく見られる）批判と関連した変化である。

ワットモアの解釈によれば、さまざまな批判のうちスキナー自身をもっともセンシティブであったのは、有意性に関わるそうした批判であり、1990年代以降のスキナーは、思想史研究の有意性を示すべく、「方法から政治へ」転換を遂げた。スキナーは1960-70年代から歴史研究の有意性をさまざまに指摘していたが

²⁰ 構造（言語的コンテクスト）の側を強調しすぎている、としてスキナーはポーコックを批判している（スキナー1990: 226-227=Skinner 1988: 106-107）。ベヴィアは、「言語的コンテクスト主義」と一括されることの多いスキナーとポーコックの違いを強調し、それぞれを「ソフトな言語的文脈主義」と「ハードな言語的文脈主義」などと表現する（Bevir 1992a; 1997; 2009a; 2011b）。本稿では、紙幅の都合でポーコックについては論じないが（ベヴィアの解釈はポーコックについても、スキナーについてと同じく適切でない）、ポストモダニズムに対する両義的態度という点においてスキナーとの共通性を指摘できる（犬塚 2017）。

²¹ スキナーは、1972年以後の方法論の論文では、著者の意図の解明のためには、「信念」にも注目する必要があると主張している（スキナー1990: 162, 191-198, 263-311, 348-349=Skinner 1988: 78, 90-94, 235-259, 278; Skinner 2002: 4, 27-56）。後述のように、スキナーの思想史方法論が、分析哲学の「行為の哲学」や「心の哲学」に依拠していることをふまえれば、この主張もスキナー独自の主張としてではなく、分析哲学との関連において理解すべきであるように思われる。分析哲学の「行為の哲学」や「心の哲学」において、認知的な心的状態を意味する belief は、意図 intention、欲求 desire、肯定的態度 pro-attitude などとともに中心的概念となっており、哲学では一般に「信念」と訳出されているので、ここでもその訳語を採用する。なお、関口正司は、著者の特権性を否定して「信条」に注目した点をもって、初期スキナーと後期スキナーを区別した（関口 1995: 695-714）。堤林剣はこの解釈を受け継いだうえで、この変化をジョン・ダンの方法論への接近と解釈した（堤林 1999: 77-86）。

²² スキナーを「実証主義的基礎付け主義」とみならず、異なった解釈として Skodo 2013: 149-156。しかしスコードは、反実証主義に対するスキナーの批判を実証主義と解釈することに示されるように、スキナーの両義的立場を適切に理解していないように思われる。

²³ スタインバーガーは、オースティン、サール、グライスの言語哲学はあくまで即興的な話し言葉を分析するものであり、入念に準備された論述テキストには適用できないという理由から、スキナーの方法論を批判する。「分析哲学」に依拠する、本来の「分析的」政治思想史研究であれば、理論・哲学の論理構造を解明する分析的手法（合理的再構成、論理的評価）を採用すべきであるというのがスタインバーガーの主張である（Steinberger 2009）。

²⁴ 「経験主義からの撤退」によってスキナーが具体的に意味したのは、第1に、経験的知識の判断依存性（事実の理論的負荷）ゆえの「経験主義的認識論への攻撃」、第2に、事実命題と検証主義についての論理実証主義への挑戦である（Skinner 1975: 209-210）。

25、さらに批判に応じるべく研究の方法と内容を変化させた、というのである²⁶。たしかに、近年のスキナーは、ニーチェに由来しフーコーが定式化した「系譜学」の手法を採用している²⁷。スキナーは「近代国家の系譜学」を論じて、国家概念の「偶然的・論争的性質」を示すことを通じ、国家論への寄与をめざしている (Skinner 2009: 326)。

2) イデオロギー・権力・レトリックへの注目

第2に、スキナーは、『政治のヴィジョン』第1巻(2002)の最終章を典型とするように、政治概念の偶然性や歴史的变化を強調するとともに、思想や規範的概念を、世界をめぐる陳述としてではなくイデオロギー論争の手段とみなす方法論的観点を重視するようになった。これはテキストに、イデオロギー、権力、レトリックという側面からアプローチすることを意味しており、スキナー自身はこの方法論的観点をやはりニーチェやフーコー、さらにはウェーバーやコゼレックと関連づけている (Skinner 2002: 5, 175-187)²⁸。

これは、マイケル・フリーデンのイデオロギー分析への接近であるが²⁹、実際にはこの変化についても、(第1の変化と同じように)以前のスキナーの仕事に萌芽を認めることができる。『ホップズの政治思想における理性とレトリック』(1994)におけるレトリックへの注目はよく知られているが、さらに、こうした方法論的観点の出発点として、1974年の「政治思想と政治的行為の分析における問題」(『意味とコンテクスト』に所収)を挙げることができる。この論文は、政治思想を原因、政治的行為を結果とする因果的説明のモデルを退けて(やはりスキナーは因果的説明の代替を追究している)、政治的行為を正統化するために用いられた手段(イデオロギー)として政治思想を捉える説明モデルの妥当性を示そうとしたものである。

3) 複数の読み方の受容

第3が、複数の読み方の受容である。

たしかにスキナーは、ごく初期から、「唯一の正しい読み *the correct reading*」に到達できるとの発想を批判しているし、テキストには著者が意図しなかった意味があることも否定しなかったが(スキナー1990: 143, 159=Skinner 1988: 68, 76)、しかし同時に1970年代には、いかなる読みかたをするにせよ、テキストを理解するためには、テキストの「歴史的意味」の復元が必要条件であるとの立場だった。これは、自らの方法論のステータスについての、相当に強い主張である(スキナー1990: 213, 222=Skinner 1988: 99, 104)。

ところが、『意味とコンテクスト』(1988)までに、スキナーは複数の読み方の妥当性を認めるに至っている。この段階で彼は、著者の特権性を当初想定したことを自己批判するとともに、ガダマーやリクールやデリダに依拠して提示される批判を吟味しながら、ポストモダニズムの相対主義・懐疑主義的立場を検討している(紙幅の都合ゆえ詳細は割愛)³⁰。一方でスキナーによれば、コミュニケーション行為が成功しうる(行為の意図の把握が可能である)という一般的事実は、「読み取りを期待できる間主観的意味」があることを示しており、著者の意図を蓋然的に推定することは不可能でも、無意味でもない。他方でスキナーは、テキストにはさまざまな意味があり、複数の読みが可能であるというポストモダニズムの主張を受容して、そのうえで自らのアプローチをひとつの読み方(歴史研究として読み方)として擁護する。テキストはさまざまに読むことができるが、歴史的意味を知りたい場合には著者の意図を理解すべきというのが新しい立場である(スキナー1990: 220, 336-338, 349-355, 360=Skinner 1988: 103, 272-273, 278-281, 284; cf. Burns 2011)。

こうした方法論的立場は、13年後の論文「政治思想史のコリングウッド的アプローチの形成、それへの挑戦、その未来」(2001)でも継承されている。ここでスキナーは、一般にケンブリッジ学派の方法論と呼

²⁵ 客観性を高める、寛容を育む、視野を拡大する、現代に至る来歴を知るなど (Skinner 1969: 49, 100; スキナー1990: 118-121, 216-217, 363-367=Skinner 1988: 64-67, 101-102, 286-288; cf. Skinner 2002: 5-6)。

²⁶ Whatmore 2016: 54, 68-75, cf. Skinner 1998: 108. ワットモアと別様の解釈として Koikkalainen 2015。

²⁷ Lane 2012 は、スキナーのニーチェ理解の妥当性を検討している。

²⁸ この議論のなかで、「理想的発話状態」を想定する「現代のネオカント的試み」が厳しく批判されていることについては、別途詳細な分析が必要であろう (Skinner 2012: 176-177)。

²⁹ 日本語で読めるものとしてフリーデン 2008=2011。

³⁰ ガダマー、デリダ、フーコーらをめぐっては論文「グランド・セオリーの復権」も参照のこと (スキナー1985=1988)。

ばれているものを「政治思想史のコリングウッド的アプローチ」と呼び、これが、大陸ヨーロッパの「ポスト構造主義・脱構築主義」の方法論と対立しているとの状況認識を示している。論文は、「ポストモダンの時代」に「コリングウッド的アプローチ」は、「まだ理論的な弁護を効果的にできるか」を問う。スキナーによれば、たしかに確実な理解は不可能であるし、テキストには著者が意識しなかった意味もある。しかし、「わたしは自分の雨傘を忘れた」というニーチェの記述は、デリダが言うように解釈不可能性ではなく、むしろコンテクストを復元することの有効性を示している (Skinner 2001)。

以上の変化をふまえたとき、スキナーにポストモダニズムへの転向と認めることが妥当だろうか。あるいは逆に、スキナー自身は2002年のインタビューで「わたしはつねに反基礎付け主義者でした」と回答しているが、こうした連続性の主張についてはどう評価すべきだろうか。スキナーはこのインタビューでこれに関連して、実証主義の基礎付け主義のプロジェクトの「失敗」を当初から前提としていたこと、コリングウッドから影響を受けていたこと、1970年代のプリンストンでローティ、クーン、ギアーツと交流していたことを挙げている (Koikkalainen and Syrjämäki 2002: 51-52)³¹。スキナーの変化と連続性、あるいはより実質的にはスキナーとポストモダニズムの関係について、どのように理解すべきだろうか。

この点については、コイカライネンの研究——分析哲学との関係に注目しながら、ラスレット、ウェルドン、ヴィトゲンシュタイン、ウィンチにまで遡り、それ以後の学問史・思想史的な文脈のなかにケンブリッジ学派の歴史的展開を位置づける研究——が一定の見通しを提供している。

コイカライネンは、スキナーへと合流した知的系譜として、オックスフォード哲学 (ライル、ストローソン、グライス、オースティン) の分析的な手法、ラスレットの楽観的進歩主義³²、コリングウッドの歴史主義を挙げて、こうした競合する多元的な知的文脈のなかで、スキナーやケンブリッジ学派の思想史的方法論が形成された点を強調する。コイカライネンによれば、このような多元的な知的源泉をふまえるならば、スキナーの「ポスト分析的」な変化 (クワイン、デイヴィッドソン、ローティへの接近) は単純な進化ではなく、むしろ力点の変化とみなすべきである (Koikkalainen 2011)。

コンテクストのなかでテキストの意味を捉えようとするスキナーの文脈主義は、当初より、後期ヴィトゲンシュタインやクワインを哲学的拠りどころのひとつとしていた。後期ヴィトゲンシュタインやクワインの全体論は、世界を理解可能にしている方法はコンテクストによって異なるとの理解において反基礎付け主義的であり、これは、ローティのような歴史主義的ノミナリズムとも親和的である。こうした点に注目するならば、スキナーは当初から、反基礎付け主義に連なる思想系譜と無縁ではなく、「ポスト構造主義」や「ポスト分析哲学」へ移行する素地をそなえていたとみなすことが可能である。こうした連続性と力点の変化に目を向けるならば、ベヴィアのように転向や断絶ばかりを強調するのは一面的であろう。

3 ポストスキナー世代の思想史的方法論：2つの対照的な方向

主権の担い手を「one man or one assembly」と規定した社会契約論の理論構成ゆえに、ホブズは、社会契約論の骨格部分を変更することなく、新しい共和国政権も主権の担い手と認定することが可能であった。すぐれたホブズ研究者であるスキナーも、同じように、その思想史的方法論の骨格部分を変更することなく、学問史的変動に対応することができた。しかしこのことは、スキナーに力点の変化、表現や語彙の変化を迫るような、学問史的な変動が存在したということも意味している。ここでは、政治思想史研究の現在の状況と課題に応答するためにスキナーとはまったく別様の思想史的方法論を、それぞれまったく違う方向で追究した、ポストスキナー世代の2人の議論を検討したい。思想史的方法論がすでに「スキナー頼み」ではな

³¹ 「わたしはつねに反基礎付け主義者でした。たしかにあなたが正しくおっしゃったように、このジャーゴンは1960年代には広まっていなかったが、わたしがつねに前提としたのは——そしてわたしが初期の論文のひとつで明確に論じたのは——実証主義は、われわれの判断から独立した基礎のうえに経験的な知識の構造を築く、というプロジェクトに失敗したことです」 (Koikkalainen and Syrjämäki 2002: 51)。スキナーはローティとは共編著があり、『哲学と自然の鏡』の書評も執筆している。

³² 事実を集積する手法や方法論そのものへの信頼、あるいは実証主義に対する折衷的な態度は、ラスレットとの関係に注目することで説明しうるであろう。ラスレットの、実証主義に対する複雑な態度について Koikkalainen 2009 を参照。

くなってきていることを示すのが、ここでの目的のひとつである。

3-1 マーク・ベヴィア：「ポスト・反基礎付け主義」の思想史

『思想史のロジック』の反響

マーク・ベヴィア (Mark Bevir, 1963-) は、オックスフォードでブリテン社会主義をテーマに博士号を取得後、ニューキャッスル大などを経て、現在では UC バークレーで政治学を教えている。アウトプットのきわめて多い研究者であり、A Very Short Introduction シリーズの『ガバナンスとはなにか』(野田牧人訳、2012=2013)をはじめとするガヴァナンス論や、意味や信念の解釈を重視する「解釈的政治学」の提唱(共編著『ラウトレッジ解釈的政治学ハンドブック』2016ほか)、さらにはそれに関連した政治理論史・政治学史研究(共編著『近代の政治科学』2007ほか)で知られている。

ベヴィアは、はやくからいくつもの思想史方法論を発表しているが、なかでも単著『思想史のロジック *The Logic of the History of Ideas*』(1999, CUP) は、スキナー以後もっとも数多くの論争と毀誉褒貶を惹起した思想史方法論である。すくなくとも、*Rethinking History* 4.3 (2000)、*Philosophical Book* 42.3 (2001)、*History of European Ideas* 28.1-2 (2002)、*History and Theory* 41.2 (2002)、*Intellectual Historical Review* 21.1 (2011)、*Journal of the Philosophy of History* 6 (2012)、*Journal of the History of Ideas* 73.4 (2012) を含む少なくない学術雑誌が、ベヴィアの思想史方法論についての特集を組んでいる。こうした状況にもかかわらず、残念ながら、日本語圏ではベヴィアの方法論について、これまで一切の紹介・分析がなされてこなかった。

ベヴィアは、「人間科学」の基礎として思想史研究を位置付けている。われわれが社会生活を理解するにあたっては人間の意図を理解することが不可欠であり、人間の意図は個別的・歴史的に分析するほかないからである (Bevir 2011a: 105)。ベヴィアは歴史的分析の立場(「歴史主義」)をつよく擁護しており、「ポスト分析的歴史主義」の立場から、シュトラウスやアレントのような、「真珠探し」の政治思想史(「政治思想史への非歴史主義的アプローチ」)を厳しく批判している。歴史主義は、われわれの問題関心を不当に狭めるといふ議論があるが、しかし逆に、「真珠探し」で見つかる真珠は、「われわれの哲学的・社会的・文化的・美的主張」にすぎないし、テキストがそれを正統化してくれるわけではない (Bevir 2012a) ³³。

『思想史のロジック』は、思想史研究というディシプリンについての哲学的分析である。『思想史のロジック』の冒頭に明らかなように、ベヴィアは、なによりスキナーの方法論に学びつつもそれを厳しく批判し、その代替をめざしている。彼が厳密な哲学的分析によって示そうとするのは、反基礎付け主義のもので、テキストの歴史的分析のありかたである。確実な知識を求めえないならば、すべてのテキスト解釈は等価なのだろうか。正しいテキスト解釈があるとすれば、どのような解釈がそうでありうるのだろうか。

ポスト分析的な歴史理論

ベヴィアはさまざまな箇所、『思想史のロジック』は、思想史というディシプリンにふさわしい推論形式(正当化と説明のための推論の形式)を哲学的に明らかにすることを目的にしていると説明する。

ベヴィアによれば、哲学は、さまざまな first order disciplines の推論形式を明らかにする second-order discipline である。これは、「われわれの概念の文法の研究」として哲学を捉えたヴィトゲンシュタインの「ポスト分析的な説明」に従った理解である。哲学は、ディシプリンの文法を明らかにする。したがってベヴィアのここでの課題は、われわれが思想史研究で用いている概念のセットから導かれるのは、どのような形態の推論なのか、を規範的に示すことである。こうした問題設定では、すでに、反基礎付け主義・全体論(ホーリズム)が前提となっている。この意味における哲学が明らかにするのは、基礎付けされた知識ではなく、「われわれが世界を理解するために用いている概念が含意するという意味だけによってわれわれにとって真実である知識」である。この知識は特定のパラダイム(概念のセット)をあくまで前提としており、それを共有しない場合は妥当性を欠く (Bevir 1999: ix, 2-16, 26; 2002; 2011a: 106)。

³³ Bevir 2012b も参照。

『思想史のロジック』がこうした課題を遂行するにあたって援用するのは、クーン、クワイン、後期ヴィトゲンシュタイン以降の分析哲学である。それは、「所与の真理」を前提にせず、「意味論的な意味」は文脈に依存する（知は「信念体系 web of beliefs」に依存する）とみなす反基礎付け主義・全体論の潮流であり、ベヴィアはこれを「ポスト分析的」分析哲学と呼んでいる。「ポスト分析的」とは、論理実証主義の「分析」概念（「総合」と二元的に対比された「分析」）を否定して以後、という意味である。

それゆえベヴィアの試みは、「反基礎付け主義的な哲学の伝統を思想史のロジックへと拡張すること」である。歴史理論の側から見れば、これは、レトリック（ホワイト）や権力（フーコー）ばかりが注目される流行のなかで、分析哲学と歴史研究は非両立的とみなす通俗的なカリカチュアに抗って³⁴、「ポスト分析哲学の歴史理論」を示そうとする試みである（Bevir 1999: 4-6, 310; Bevir 2001; Bevir 2011c）。

客観主義と相対主義への両面批判

『思想史のロジック』では緻密な哲学的分析が続いていくが³⁵、しかし、ベヴィアの立ち位置やめざす方向は明瞭である。ベヴィアは、一方では客観主義・基礎付け主義、他方では、極論に陥った「非合理的な反基礎付け主義」への両面攻撃をおこなっている。重点が置かれるのは後者の課題である。

ベヴィアは反基礎付け主義の系譜に連なるが、同時に、「非合理的な反基礎付け主義」や「反基礎付け主義的伝統のうちのポスト構造主義的・ポストモダン部門」を退ける。それは、客観性の概念を一切廃棄してすべての思想史解釈を等しく疑わしいとみなしたり、主体性を疑って信念は無意識的・社会的に決定されてしまうとみなす、懐疑主義・相対主義の立場である。そうした思想史方法論の代表とされるのは、ドミニク・ラカプラである（そのほかデリダ、フーコー、リオターラらが言及される）。基礎付け主義が退けられて純粋な理性や経験が疑われるなか、いかに主体性や客観性について考えるか——この問いについてベヴィアは、懐疑主義・相対主義を退けて、「合理的な反基礎付け主義」から「真理と理性をめぐるポスト形而上学的概念」を示そうとしている（Bevir 1999: 6, 310-313; Bevir 2002: 85-86）。

ベヴィアのこうしたスタンスは、『思想史のロジック』第3章の「客観性」をめぐる議論に典型的に現れている。ここで、ベヴィアは、歴史的知識の正しさや客観性をどう定めるかという問題に関して、基礎付け主義にも相対主義にも陥らない、正当化の「人類学的形態」を論じている。

ベヴィアによれば、一方では、経験や推論の文脈依存性ゆえに、純粋な事実認識や経験的データ（それにもとづいた検証主義・反証主義）に依拠したり、特定の方法・手続きに依拠したりしての³⁶、歴史的知識の正当化は不可能である。しかし他方、「非合理的な相対主義」も誤りである。われわれは歴史的知識を正当化できないとする「ポストモダン懐疑主義者」（デリダ、フィッシュ、ラカプラ）や、先入見の影響は不可避であり他人や過去は理解不能とする「現象学的懐疑主義者」（ガダマー派）は誤りである。ベヴィアによれば、ここには正しい弱い主張から、誤った強い主張への飛躍がある。確実性の不在や文脈拘束性は、思想史の不可能性を意味するわけではない。

ベヴィアは所与の真理の探究から、人間の実践の擁護へと転回するかたちで認識論を再定式化する（「人類学的転回 anthropological turn」）。客観性は外部の真理に依拠するのではなく、人間の行動や実践の産物として再定式化される。すなわち、経験則が示す望ましい客観的行動（「合理的な認識論的实践」）から、客観性をめぐる一定の合理的規準が導かれるというのである。具体的にはわれわれは、競合する複数の説明を、正確性・包括性・一貫性といった認識論的規準にもとづいて比較する営みを通じて³⁷、「われわれにとっての」客観的・合理的な決定を導くことが可能であり、こうして歴史的知識の正当化をなしうる（Bevir 1999: 78-

³⁴ 分析哲学と歴史主義の関係をめぐる歴史叙述として Bevir and Choi 2015。ベヴィアは、反基礎付け主義と規範理論をいかに接合するか、分析哲学の遺産をいかに規範的関心に接合するかとの関心から、「分析的政治哲学」の歴史叙述を試みている（Bevir 2011c）。

³⁵ 「本書はあまりに多くの争点、人物、潜在的な主張を論じているので、時として、飛んでいく多くの標的を射撃するベヴィアを載せて、人口密集地域を激走する弾丸列車のような気分を抱かせる。ベヴィアはいくつかの的は射いているのだが、彼の議論の射程や詳細をまとめるのは不可能である」（Pippin 2001: 165）。

³⁶ たとえばニュークリティシズムの精読や、スキナー的文脈主義など。いかなる思想史の方法も、理解の客観性を機械的・論理的に保証する「発見のロジック」ではない（必要条件でも十分条件でもない）（Bevir 1999: x, 10, 80-89; 2011a: 108）。

³⁷ 言い換えれば、歴史家がなすべきは、コリングウッド的な追体験 re-enact ではない（Bevir 1999: 157-158）。

126, 127; 2001; 2002)。すなわち、基礎付け主義に依拠せずとも、それぞれのパラダイムのなかで、それぞれのパラダイムにとっての客観性や正しさを全体論的に示していくことは可能であるというのである³⁸。

信念の共時的・通時的説明としての思想史研究

ベヴィアの思想史方法論には詳細に説明したり吟味したりすべき点が多いが、紙幅ゆえ、ここではもう1点のみ、テキストやその意味をめぐる存在論-認識論の次元の議論を確認しておこう。

『思想史のロジック』第2章は、思想史研究が分析対象とする「歴史の意味」を検討する。ベヴィアによれば、思想史研究が解明すべきは、テキストがある個人にとって有していた個別的な意味（「解釈学的意味 hermeneutic meaning」）である。これはテキストの意味を具体的な人間に紐付けて、あくまでもだれかにとっての意味として捉える立場であり、ベヴィアはこの方法論的立場を「手続き的個人主義」と呼ぶ³⁹。

この「手続き的個人主義」は、第1に、著者にとっての意味だけではなく、読者（過去の読者）にとっての意味、つまりは、著者を越えた意味、著者がコントロールできない意味を問うことを可能とする。こうした分析対象の拡張は、受容理論の知見をベヴィアが一定程度取り入れていることを意味する。ただし、読者にとっての『リヴァイアサン』の意味は、ホップズにとっての『リヴァイアサン』の意味とは別であり、ホップズにとっての『リヴァイアサン』の意味を知りたいのであれば、それにふさわしい研究が必要となる⁴⁰。第2にこの「手続き的個人主義」は、個人から切り離された意味を排除する。歴史的に存在するのは具体的なだれかにとっての「解釈学的意味」（「作品 work」の意味）であり、テキストそのものには意味はないというのがベヴィアの立場である。思想史研究では、個人と関連付けられないテキストの意味（たとえばフーコーの言うエピステーメー）を論じることは不可能である（Bevir 1999: 31-77; Bevir 2002: 88）。

『思想史のロジック』第4章は、こうした「解釈学的意味」について、「行為の哲学」や「心の哲学」を援用しながらさらに詳しく論じている。作品の「解釈学的意味」（著者にとっての意味）を明らかにすることは、それを生み出した動機でなく、作品によってその著者が伝えようとした信念（「表明された信念」）を解明することに等しい、というのが主張の骨子である。これは、意味に関わるのは信念であり、信念から意図をたどって作品の意味を明らかにしようとする、意図主義（志向主義）のアプローチである。

ベヴィアはヒューム主義（行為の動機付けを論じる場合に信念と欲望を区別する立場）を修正して、行為を「信念」と「肯定的態度 pro-attitude」（動機づけを与える心的状態）から説明する立場を採っている。このうち、思想家が明らかにすべき「解釈学的意味」とは、「信念」であり動機（「肯定的態度」）ではないというのがベヴィアの立場である。たとえば、宗教的和解を訴える主張が、名声と富を求める動機からなされたとしても、そうした動機は「作品の意味の一部にはなりえない」（Bevir 1999: 132）。ベヴィアによれば、スキナーの方法論の問題点のひとつはまさしくこの点にある。「発語内的力」には、信念だけでなく「肯定的態度」も含まれるからである（Bevir 1999: 129-142; cf. Bevir 1997: 173-176; 2011a: 109-110）。

意味と信念をめぐる以上の議論は、具体的な思想史分析の営みについての規範的記述の土台である。ベヴィアによれば、思想史研究が信念を分析するにあたっては、まず誠実性、意識性、合理性（内的一貫性としての合理性）をそなえているとの想定が採用される（『思想史のロジック』第4章後半、Bevir 1999: 142-173; 1997）⁴¹。そのうえで、合理的な信念について共時的な説明を与えるためには、その信念を当人の信念体系に位置付けるとともに、さらには、その信念体系を社会の知的伝統に位置付ける文脈化の作業が必要である（第5章、Bevir 1999: 174-200）⁴²。歴史的変化を明らかにする通時的な説明においては、新しく生まれた理解と信念体系のあいだのディレンマに注目することとなる（第6章、Bevir 1999: 221-251）。以上とは

³⁸ ベヴィアは、認識の正しさを最終的に担保するために、一種の実在論に依拠している。われわれが存在していること、われわれが世界で穏健にうまく活動できている能力は、われわれの認識、知識、信念がまったく的的外れではなく概して信頼できることを示唆するというのである（Bevir 1999: 106-116, 170-171; 2002: 97-98; cf. Stern 2002）。

³⁹ これは、「原子論的個人主義」（個人は社会から孤立しようとの立場）でも「方法論的個人主義」（社会全体に言及することなしに社会を分析すべきとの立場）でもない（Bevir 1999: 54）。

⁴⁰ ただし本書が、読者にとっての意味を実質的に論じる箇所は少ない。またこうした「弱い意図主義（志向主義）」では、著者の意図は「著者にとっての発話の意味」として定式化されるので、著者が意識しなかった意味も含めることができる（Bevir 1999: 67-71）。

⁴¹ この想定を議論するなかで、シュトラウスのエソテリシズムが批判される（Bevir 1999: 145-150）。

⁴² 思想史学にていかに伝統を非本質主義的に実体化せずに取り扱うかをめぐる議論は、固有の価値を有する（Bevir 1999: 200-213）。

別に、誠実性・意識性・合理性を欠いた信念を説明するためには、別の作業が必要となる。その場合には、たとえば内閣支持率を上げたくて虚偽を語った場合のように、表明された信念だけではなく、それを生み出した動機（肯定的態度）も説明する必要がある（第7章、Bevir 1999: 265-298）⁴³。

「ポスト・反基礎付け主義」の思想史研究

ベヴィアはこのように自らの思想史方法論を示していくなかで、すでに紹介した点のほかにも、スキナーの文脈主義方法論をさまざまに批判している。——1) 言語的コンテキストだけで発語内的意図を解明できるとは限らない。2) 言語的コンテキストはそのほかのエヴィデンス（著者の別のテキスト、伝記的事実、社会的・政治的文脈など）と同じステータスにあり、どのエヴィデンスが有効かはあらかじめ決められない。3) 言語的コンテキストが明らかにする言語的意味は、個別的な「解釈学的意味」を明らかにする十分条件でも必要条件でもない。4) 言語慣習に従わない発話もある（Bevir 1992a; 1999: 40-52; 2009: 223）。

ところが、こうした幾多の厳しい批判にもかかわらず、『思想史のロジック』は、論述の最後に至ってスキナーに連帯を示している。それは、ベヴィアが、再度「ポストモダニズムとポスト構造主義に大きく依拠したかたちでの反基礎付け主義」（相対主義・懐疑主義）を批判して、そのために「近代の観念論」の系譜に連なることを宣言するなかである。ヘーゲル、クローチェ、グリーン、コリングウッド、ショーペンハウエル、ヴィトゲンシュタインと継承されてきたこの知的伝統が伝えるのは、「あらゆる人間科学の中心にある思想史へのコミットメント」と、「ローカルな推論に対しての強いコミットメント」である。「コリングウッドとヴィトゲンシュタインに依拠して、ラブジョイやシュトラウスといった哲学者の作品が示す純粋理性を否定した」スキナーはこの知的伝統に連なっており、「ここにおいて、わたしの議論はスキナーの議論に接近することになる」（Bevir 1999: 314-315）。

ここにも明らかなのは、反基礎付け主義に対するベヴィアの両義的な態度である。ベヴィアは、基礎付け主義を退ける点で反基礎付け主義を前提にしなが、反基礎付け主義のひとつの帰結である相対主義・懐疑主義の克服をめざす。この意味でベヴィアは、反基礎付け主義の次のステージである、「ポスト・反基礎付け主義」のステージの課題に取り組んでいると表現することができよう。

『思想史のロジック』には、さまざまな批判が寄せられた。スキナーやポーコックについての理解が適切かどうかには大いに疑義があるし⁴⁴、あまりに哲学的で、ときに形式的なベヴィアの議論が、はたして思想史研究の実践に役立つか、関係しうるかとの観点からの批判も少なくない⁴⁵。

たしかに『思想史のロジック』は、思想史研究の具体的な方法の提唱を目的としたものではない。しかし、それは、テキストやその意味をめぐる存在論-認識論の次元の議論を深めるとともに、説明や正当化のあるべき姿にフォーカスして、言ってみれば、反基礎付け主義の時代における思想史研究の哲学的前提を明らかにしようとした。ベヴィアは「ポスト分析的」な分析哲学に依拠して、反基礎付け主義に由来する懐疑主義・相対主義と対峙した。それは、ファイヤーアーベント的に「なんでもあり」とする方法論的立場である。そうした立場に対してベヴィアは、われわれが共有する概念や日常的な世界認識を出発点にして、ロ

⁴³ 「すべての人間科学は、信念や行動にふさわしい説明の形式に依るべきであるというのが私の主張である。そうした説明の形式は、『思想史のロジック』で説明したように、行動を信念や欲望に、信念を信念体系に、信念体系を伝統やディレンマに関連づける。私の理解では人間科学の多くで支配的となっている形式的な相関、モデル、分類は、厳密に言えば説明ではない。それらはデータであり、人間科学の研究者が文脈的・歴史的に説明を与えるべきものである」（Bevir 2011a: 114; cf. Bevir 1999: 174-177）。

⁴⁴ スキナーなど批判対象の理解の不適切さを指摘するものとして Palonen 2000; Stern 2002; Syjamaki 2011; Stanton 2011; Blau 2017: 245。スキナー自身によるベヴィアに対する批判は Skinner 2002: 5, 179。

⁴⁵ 歴史家からのもっとも充実した書評として Ankersmit 2000; Bevir and Ankersmit 2000。ブライアン・ヤングは、哲学によって思想史の「ザ・ロジック」を示す企ては、歴史家の実践に対する「定冠詞の暴政」であると厳しく評価する（Young 2002; see also McCullagh 2002）。アンカーズミットなどすくなくない歴史家が、分析哲学と歴史理論の相性の悪さを指摘するのに対し、マルティニッチは反対に、分析哲学の援用が少ない、不適切であるとの立場から同書を批判している。意味論が不適切、比較の手法は全体論とは両立しない、一貫性を重視するのは誤り（歴史家は信念体系の全体を知る必要はない）、モダニズム・ポストモダニズム・歴史主義の理解が適切ではないというのがマルティニッチの批判である（Martinich 2012）。言説の権力性やレトリックに鈍感なことについて Sturman 2000; Martin 2002、思想史研究の具体的事例への言及が希薄であることについて Megill 2000; Young 2002、好意的な評価として Skodo 2009。

一カルな文脈のなかで合理的・客観的と評価できる知識のありかたを提示し、歴史解釈の妥当性を判定する認識論的規準を示そうとした。「ポスト・反基礎付け主義」の思想史方法論のひとつのかたちである。

3-2 エイドリアン・ブロー：不確実性の時代の思想史研究のハウツー

エイドリアン・ブロー (Adrian Blau, 1972-) は、現在キングズ・カレッジ・ロンドンのシニアレクチャラーであり、『オックスフォード版ホブズハンドブック』の分担執筆などの業績をもつホブズ研究者である。ユーモアを交えた叙述が持ち味のひとつであり、シュトラウスの思想史方法論を検討した論文では、シュトラウスの論述スタイル (エソテリシズム) を模した「ホブズについての考察」という風刺論文を付している。シュトラウスの手法に従えば、ホブズが (もちろん知るはずもなかった) ベートーベンの音楽についてひそかにメッセージを発していると「証明」できてしまうというのである (Blau 2012: 152-153)。

思想史方法論の論文は比較的新しく、2010年代に入ってからである。ブローの方法論も日本語圏では紹介を欠いてきた。ブローは、ベヴィアとはきわめて対照的に、具体的な研究成果の成功例・失敗例をふまえながら、よりよいテキスト解釈を可能にするための具体的・実践的手法を論じるアプローチを採っている。

KKV のインパクト：不確実性の制御

ブローの思想史方法論については、まずなにより KKV のインパクトを指摘できる。

KKV (『社会科学の研究・デザイン』) は、定量的か定性的かというスタイルの違いにかかわらず、経験的な研究であれば、共通した「推論の論理 (ロジック)」が存在すると主張した。そのなかで論じられる重要なメッセージのひとつは、「不確実性を評価せずに行う推論は、本書でいうところの科学ではない」である。経験的な研究ではつねに「結論は不確実」だが、「科学的推論のルール」に従って「秩序だった思考方法」を採るなら、結論の妥当性や確実性を向上させることができる (キングほか 1994=2004: 1, 6, 8)。

ブローは、最初の方法論論文である「不確実性と思想史」(2011)において、KKV や同じ著者たちの追補論文「研究デザインの重要性」(『社会科学の方法論争』所収)に言及し、キング、コヘイン、ヴァーバは「不確実性が経験的な研究の中心に位置するとみなした」と整理したうえで、不確実性をめぐる彼らの知見を思想史研究に応用しようとする。思想史研究においても、オーサーシップや執筆年代、あるいは信念・動機・意図の解明などは経験的な研究であり、コリングウッドやスキナーも指摘したように歴史研究では不確実性は回避できないからである (Blau 2011: 358-361)。

思想史研究においても不確実性をめぐる問題になにより留意すべきとみなし、不確実性を減らす・報告するという基本方針を採用する点において、ブローは、最新の論文に至るまで一貫して KKV に従っている。これは、100%の確実性は不可能であるという前提を受け入れたうえで、不確実性をうまく制御して研究の改善をめざす方向性である。そのうえでこの問題をめぐるブローの議論では2点に注目すべきである。

第1は、思想史研究においては、KKV の議論に修正が必要であるという主張である。ブローによれば、思想史研究では、不確実性は「主観的不確実性」である。研究者が報告する不確実性は、event (なにが起きたか) の不確実性ではなく、event についての belief (用いたエヴィデンスがどれほど強いと考えているか) の不確実性である。しかも、思想史研究では、そうした主観的不確実性の程度を報告・評価するにあたっての合意された方法は存在せず、それも主観的である (Blau 2011: 362-366)。

第2に、ブローは不確実性をめぐる問題状況のうち、「不完全決定性 underdetermination」をめぐる問題を強調する。これまで主に科学哲学で論じられてきた「不完全決定性」とは、同一のエヴィデンスに複数の説明がつねに存在するという事態を意味する。エヴィデンスに複数の説明が存在するならば、「あるエヴィデンスに支えられているから」という素朴な検証、「あるエヴィデンスに反しているから」という素朴な反証は妥当でない。つまり「不完全決定性」は、素朴な検証主義・反証主義を退ける。

このことのひとつの帰結は、自らの解釈に適合した、都合のよいエヴィデンスから解釈の妥当性を示すだけでは不足する、ということである。どうしたらよいのか。都合のよいエヴィデンスのみに注目する「確証バイアス」に抗って、自説に適合しないエヴィデンスを検討することが不可欠であり、「トライアンギュ

レーション」(さまざまな異なるエヴィデンスを用いる手法、三角測量)によって、さまざまなエヴィデンスにもとづいていずれの解釈が強いか弱いかを検討することが必要である。「よい刑事が前もって、弁護士や裁判官はいかに挑戦してくるかを検討するように、代替の解釈に触れておくことは、不可欠の防衛的戦略である」(Blau 2011: 360-361; 2012: 144; 2015a: 1184-1188; 2015b: 32-36; 2017: 261-263)。

「テキスト解釈の科学」

こうした検討のなかでブローは、不確実性を適切に取り扱っているよい研究と、そうでない悪い研究に具体的に言及している。彼が好意的に採りあげるのは、ノエル・マルコムとキンチ・ヘクストラのホップズ研究である(Blau 2011: 368-369; 2015b: 48)。悪い研究としてなにより言及されるのはレオ・シュトラウスであり、シュトラウスについては個別に検討した2論文がある。そこでブローは、これまで十分には批判がなされてこなかったとの認識にもとづいて、シュトラウスを正面から批判している。

シュトラウスは、不確実性を減らす・報告するというすべての経験的研究が従うべき原則に反しており、その方法論のナイーブさは明白である。そうしたナイーブさは繰り返し多くの箇所を観察され、根本的なものであるというのがブローの診断である。シュトラウスは、自説に適合する都合のよいエヴィデンスのみにもとづいて推論し、しかも自説の確実性を誇張して断定している。白でなければ黒という不適切な二元的断定や、論理的誤りも多い。シュトラウスは方法や方法論を示したのではなく、仮説を提示しそれを不適切に検証しただけであって、彼が示したのは方法でなく「貧弱なりサーチデザイン」である。

ブローによれば、こうしたナイーブさはエソテリズム以前のシュトラウス(1935年の『ホップズの政治学』)からすでに見られるので、エソテリズムの手法(テキストに明示されていないメッセージを行間を読んで明らかにする手法)とは区別できる。ブローは、エソテリズムの手法には一定の理解を示すが、シュトラウスのエソテリズムは厳しく批判する(テキストの中心を重視するが中心の定め方が恣意的である、数の一致にこだわるが統計学の知見を欠いているなど)⁴⁶。

こうしたシュトラウス批判のなかでブローは、「テキスト解釈の科学」を提唱している。ブローによれば、テキスト解釈者は、意識してるかどうかはともかく、多くの場合に自然科学・社会科学と同じようにすでに科学的考えを実践している。たとえば、中核的概念を定義なしに用いることは不適切であること、帰納的推論は危ういことをテキスト解釈者も心得ているし、「選択バイアス」「不完全決定性」「トライアングレーション」といった言葉は使わないにしても、これらが示す方法論的含意をふまえながらテキストを解釈している。ブローは、科学を、予測や法則でなく推論のロジックから定義付けて、そうした意味における科学には、社会科学やテキスト解釈も含められるという立場である(Blau 2012:142-154; 2015b: 29-51)。

実践的なハウツーアプローチ

ブローはごく近年には、思想史研究・テキスト解釈における具体的な留意点——なにをなすべきか、なにをなすべきでないかを示した「政治思想史における経験的解釈のための実践的ガイダンス」(2015a: 1178)——を、ハウツー形式で論じている。これまでの思想史方法論は、研究の意義や価値ばかりを論じて、実際のハウツーを論じてこなかったのが、これまでの方法論の穴を実際の研究活動にもとづいて埋めようというのである。ブローの判断では、スキナーの方法論、あるいは『政治理論——さまざまな方法とアプローチ(日本語版書名: 政治理論入門)』(レオポルドほか 2008=2011)にも具体的アドヴァイスはわずかである。

論文「刑事捜査 Detective-Work としての政治思想史」(2015)は、テキスト解釈を刑事捜査になぞらえて、そのアナロジーにもとづいて思想史解釈の具体的なハウツーを論じている。テキスト解釈と刑事捜査は、不完全でさまざまな解釈を許す断片的なエヴィデンスから、過去の出来事を説明しようとする点で共通点が

⁴⁶ 2015年の論文では、批判対象をシュトラウスだけでなく解釈学にまで拡張している。主たる批判点は3つ。(1) これまでに用いられてきた方法論の語彙は、方法や解釈の誤りを隠蔽する機能を果たしており、とくに[英語の]「解釈学」という語彙は、たとえば「あなたは違う解釈学を採用しているのですね」との表現を通じて解釈の誤りを不問にしている。(2) 解釈学は正確さを欠いており経験的問いの探求には不向きで、テキスト解釈においても明晰な思考を妨げる。(3) ガダマーは、人文社会科学では科学的方法は不適切であると主張したが、ガダマーが語っている科学はデカルトなど17-18世紀の科学であり、現代の科学的推論のロジックを理解していない(Blau 2015b: 37-51)。

多いというのである。編著『分析的政理論の方法』(2017)は、「政理論における最初の「ハウツウ」ハンドブック」(Blau 2017: 1)をめざした著作であり、反省的均衡、概念分析、実証的政理論、テキスト解釈といった「分析的政理論」のアプローチごとに、具体的に留意すべきハウツウを論じるという形式を採用している⁴⁷。この本(の一部)では、実践的アドヴァイス——たとえば、「著者のテキストをひろく読む」、「経験的分析と哲学的分析を結びつける」など——を太字で強調する実用参考書の体裁も採っている。

こうしたハウツウアプローチにおいても、ブローが、不確実性と不完全決定性をめぐる問題にフォーカスし、より妥当な解釈を導くための「推論のロジック」を強調するのは、それまでと同様である。これらのハウツウ作品でとくに強調されるに至ったのは以下の2点である。

第1は、テキスト解釈における哲学的分析、非歴史的アプローチの再評価である。これは、スキナー的歴史主義が一般化し、かつてとは逆に、歴史偏重になってしまっていることへの異議申し立てである。テキストを歴史的・文脈的に読むことが全てであるとする発想こそ、現在では憂慮すべき問題だということである。『分析的政理論の方法』の担当章の末尾は、実に、「この章は、主流派アプローチ[スキナー的アプローチ]からわれわれを解放する試みであった」(Blau 2017: 264)との一文で締めくくられている。

歴史的分析も哲学的分析もいずれもテキスト解釈には必要であり、実際のテキスト解釈の実践を見ても——スキナーのホブズ解釈がそうであるように——実は、この2つの分析を併用してなされているというのがブローの理解である。これは、歴史研究としての政治思想史研究と、政理論・政治哲学研究の相互補完性・相互依存性をめぐる規範的主張でもある。「政理論・政治哲学の研究者は高度な歴史研究をすることに尻込みするであろうし、歴史研究者は、高度な哲学的研究をおこなうのを好まないであろう。しかし政理論・政治哲学の研究者が歴史に感受性を高めることも、歴史研究者が哲学に感受性を高めることも可能である」(Blau 2015a: 1189)。そうした乗り入れの知的価値を承認することこそ必要である⁴⁸。

第2は、思想史方法論の対立を架橋すべきことである。すくなくない箇所ではブローは、方法論の対立と分断が、われわれの思考と行動を制約して研究に悪影響を及ぼしていることを指摘する。「自らを文脈主義者、哲学者、あるいはシュトラウス主義者とみなすことで、重要なエヴィデンスから遠ざかってしまう可能性がある」(Blau 2017: 263)。方法論の違いと対立ばかりが強調されて、立場を越えて受け入れられるべき「仮説を検証するための基本原理」(Blau 2017: 261)は等閑にされてきた。

これに対するブローの戦略は、第1にはすでに論じたように、アプローチの違いを越えて採用しうる、共通の「推論のロジック」を示すことであった(みんなに共通のルールがあるんですよ)。第2は、歴史的分析和哲学的分析の併用を説く議論が示しているように、いかなる研究活動でも、さまざまなアプローチや手法を組み合わせることが必要であり、実際の研究はそのようになされているとの主張である(自分だけのスタイルと思っているみたいだけどほかの人も使ってるし、あなたも別のスタイルを使ってますよね)。

さまざまなエヴィデンスを組み合わせる「トライアンギュレーション」が、あらためてこの文脈で論じられる。テキスト解釈には、すくなくとも4種類のエヴィデンス(テキスト、コンテキスト、哲学、動機)があり、スキナリアンかシュトラウシアンかというアプローチの違いを問わず、実際の解釈活動ではさまざまなエヴィデンスを組み合わせている。スキナーこそ実は、コンテキスト分析とテキスト分析を組み合わせた「もっとも優れたトライアンギュレーター」であった(Blau 2015a; 2017)。

ブローは、現代の政治学方法論を代表する KKV を参考にしながら、テキスト解釈において不確実性に対処するための「推論のロジック」を提示しようとした。ブローは、テキスト解釈においてなにをなすべきか、なにをなすべきでないかを相当の具体性をもって示している。彼がめざすのは明晰な推論、より妥当な解釈であり(編著『分析的政理論の方法』に明らかなように彼も分析哲学の影響のもとにある)、「テクス

⁴⁷ 各章で具体的に採りあげられるアプローチは順に、思考実験、反省的均衡、契約主義、道徳感情主義、リアリズム、現実主義的理想主義、概念分析、実証的政理論、合理的選択、テキスト解釈、比較政治思想、イデオロギー分析である(第3～14章)。第2章は「いかに分析的政理論の論文を書くか」、最終章は「いかに政理論の PhD をなすか」。

⁴⁸ ブローは哲学的分析だけではなく、概念史アプローチ、「体系的再構成」・「選択的再構成 adaptive reconstruction」(その一例として A. J. Simmons のロック解釈)、エソテリシズムの意義や可能性も論じている。(Blau 2017: 250-257, 260-261)

ト解釈の科学」という自己規定が示すように、ブローは、テキスト解釈を自然科学や社会科学と共通する科学とすべく模索している。

科学を標榜することは、それだけで反発を惹起しかねない方向性である。しかし、不確実性や不完全決定性、観察の理論負荷性を前提とし、100%の確実性を断念し、さらには単純な検証主義・反証主義を退けるブローがめざすのは、エヴィデンスにもとづいた真理発見モデルという意味での科学主義・実証主義ではない。ブローがめざしているのは、明らかにポスト実証主義以後の科学である。

ブローは、一方でスキナー的歴史主義・文脈主義が優勢でありながら、他方では、アプローチごとの対立や分断の弊害が明らかな、思想史研究・テキスト解釈の学問史的現状に直面している。こうした問題に対して彼は、多様なアプローチやエヴィデンスを組み合わせるべきことを説くとともに、共通する「推論のロジック」を提示することで、具体的な研究成果の改善をめざしている。

4 いくつかの示唆

以上の分析から何か言いうることがあるだろうか。全体に関わる示唆を4点にわけて整理したい。

「ポスト・ポスト実証主義」という学説史的ステージ

第1は、政治思想史研究の現状の学説史的な位置づけにかかわる。

1960年代から70年代にスキナーが提示した思想史方法論は、実証主義の因果的説明とは異なるかたちでテキストの「説明」を示そうとする「ポスト実証主義的」関心と密接に結びついていた。このときスキナーは、実証主義かそれに代わるものか、という対抗軸のなかに位置していた。ところが、ポストスキナー世代の方法論では、その対抗軸は、議論すべき中心的課題からはすでに外れている。ベヴィアにせよ、ブローにせよ、実証主義の対案を提示することは主たる関心事ではない⁴⁹。彼らは、言ってみれば、実証主義批判が一回りした、ポスト「ポスト実証主義」の地点に位置する。実証主義や基礎付け主義に対する批判が人口に膾炙して、知識の確実性・客観性が懐疑されるなかで、いかにして(かつてとは違うかたちで)知識の正しさを確保し、いかにしてより適切で妥当性の高い思想史研究をなすかという課題こそ、ポストスキナー世代の思想史方法論の課題である。

現代の思想史研究者が、一方において、テキストに複数の意味や解釈を認めるという意味で、ゆるやかな相対主義的観点を採り、同時に他方では、査読や学位審査においては、よい解釈と悪い解釈を間主観的な規準にもとづいて判別できる、という学問観を採用しているとしよう。このとき、その思想史研究者は、ベヴィアやブローと同じ存在論-認識論的な前提に立っている。そのうえでベヴィアやブローが論じたのは、知識の確実性や自明性が揺らぐポスト基礎付け主義的前提のもとで、いかによい論文と悪い論文を区別しているか、区別すべきかという問いへのそれぞれの解答であった。基礎付け主義は疑わしいので、相対主義・懐疑主義はやむをえない、という発想は彼らのものではない。

すなわち、1) 現代の思想史方法論は、もはやスキナーが思想史方法論を論じた時点とは異なった課題や文脈のもとにあり、もはや「スキナー頼み」していればよい学問史的ステージではない。2) さらに言えば、ポストスキナー世代の政治思想史方法論は、現在の日本語圏における政治学の「方法論的転回」とは大きく異なった学問的課題と向かい合い、異なる学問史的ステージに位置している。実証主義かそれに代わるものか、因果的説明か非因果的説明か、という対抗軸で語られる方法論的課題は、思想史研究ではスキナー世代にて問われたことであり、ポストスキナー世代にとってはすでに過去のものである。

「歴史研究としての政治思想史」の拡張と修正

第2は、思想史研究の理解にかかわる。ポストスキナー世代の思想史方法論は、テキストの意味や解釈をめぐるスキナーの狭い理解を拡張して、歴史研究としての政治思想史という学問モデルを修正している。

⁴⁹ ただし思想史方法論から離れて、ベヴィアの「解釈的政治学」の提唱まで視野に入れるならば、別の評価が可能かもしれない。

テキスト解釈という営みをどう理解するかは、テキストやその意味をめぐる存在論・認識論上の理解と連動している。ポストモダニズムの諸潮流は、読者にとってのテキストの意味や、著者がコントロールできない意味に注目して、著者の特権性・中心性を相対化した。ポストスキナー世代は、こうした議論を一部ではふまえている。政治思想史の分析対象を「著者の意図」（発語内的意図）を中心に整理したスキナーに対して、ベヴィアは「手続き的個人主義」という観点を通じて、各人にとってのテキストの意味を論じる方法論を採用した。「永遠の問題」アプローチを批判してコリングウッド的歴史主義を強調したスキナーに対して、ブローは、歴史研究としての政治思想史においても、哲学的・理論的アプローチが有意であることに注意を促して、歴史か哲学かという問題設定が陥っている視野狭窄を指摘した。

ポストスキナー世代は、歴史研究と哲学研究の相補的協働を説いている。（スキナーも含め）本稿で扱った研究者はいずれも分析哲学に大きな影響を受けている。ベヴィアは自覚的に、分析哲学と思想史研究の接合を試みている。ブローは『分析的政治哲学の方法』という政治哲学のテキストで、歴史的分析和哲学的分析を併用すべきことを主張した。これは哲学的分析の擁護であると同時に、歴史的分析の擁護でもある。ここには、「政治思想史外し」は存在しない。ブローの指摘は、ある手法が排他的に、ある特定の方法的立場やアプローチや（サブ）ディシプリンに帰属する、という主張を疑ってみるべきことを伝えている。思想史研究が哲学的分析を欠いては遂行できないとするならば、思想史研究を排除した政治哲学・政治理論研究が可能かどうか真剣に検討されてよいはずである。

テキスト解釈は、テキストが過去のものであろうと現在（正しくは近過去）のものであろうと、本質的に他者理解の営みである（テキスト解釈の意義とされるものの多くは、それが他者理解であることに帰着する）。そうであるならば、1) 過去のテキストを無視することは（それが本当に可能であるとして）、歴史的他者を無視することであり、時間軸上の他者の声には耳を貸さないという態度を採るということである。

2) さらに、過去のテキストを解釈する行為が、過去の他者を理解する行為であるとするならば、読者は自由にテキストを appropriate（流用・盗用）してよいという方法的態度を——他者を appropriate することは妥当であるという前提を採らないかぎり——無条件で是認することは難しい。他者を自分の目的に奉仕する手段として扱うこと、他者に自分の世界観を押しつけること、他者の話のうち自分に興味ある話にしか反応しないことは、共時的な他者への態度としても、通時的な他者への態度としても、致命的に欠陥があるのではないか。ここで開き直りが正当化されるならば、（悪しき意味における）歴史修正主義を批判しうる方法的立脚点は存在しないであろう。もとより、そのうえで、歴史上の他者を適切に理解できるか、読み手のバイアスを排除できるかという方法的課題をふまえるからこそ、より適切な解釈やその手法をめぐって継続的な方法的考察が必要となるはずである。

方法論のコンフェッショナリズムを越えて

第3は、方法論やアプローチの分断の克服にかかわる。ポストスキナー世代の方法論は、思想史研究において分析の精度を上げるための模索のなかで、これまでの方法論の分断や対立を架橋しようとしている。ベヴィアは、答えを機械的に導く「発見のロジック」は存在せず、方法論や方法はさまざまでありうる、という方法論上の多元主義を前提にしたうえで、すべての思想史研究に共通する、あるべき推論の形式（思想史のロジック）を示そうとした。ブローは、方法論やアプローチの違いを語ることが、これまで方法論の実質的な吟味を阻害してきたとの理解のもと、彼もやはり、方法的立場やアプローチの違いを問わず従うべきチェックリストを提示した。

彼らが共通に指摘するように、特定の方法的立場やアプローチが、それ自体として解釈の妥当性（あるいは非妥当性）を示すわけではない。だめなスキナー主義者、だめなエソテリシスト、だめなガダマー主義者もいれば、その反対もいるはずである。だめな思想史研究者、だめな政治理論研究者、だめなポリティカルサイエンティストもいれば、その反対もいるはずである。方法的立場やアプローチの違いを問わず、よい解釈と悪い解釈を判別する規準を明確にしていくことは、本稿冒頭に触れたように、思想史研究においては、査読制度とデジタルデータ・デジタルツールの時代にはなお必要となっていくであろう。そのなかでは、それぞれの研究で、問いと方法について自覚的・明示的な方法的態度がますます要求されていくであ

ろう。

方法論がさかんに議論されて深化・純化していく学問史のプロセスは、学のアイデンティティが深化・純化するプロセスでもある。そしてその過程で、方法論的立場・アプローチのあいだの、あるいは(サブ)ディシプリンのあいだの、差異や優劣が強調されることは、ブローの指摘を待つまでもなく、現代の日本語圏においても容易に観察される現象である。

それが、よりのぞましい学問や研究をめざす(真摯で良心的な)学問的態度から生まれることは否定できない。しかし、初期近代ヨーロッパで300年にわたって続いた凄惨な宗教対立において、宗派間の違いや優劣を強調して対立を煽ったのは、自分たちこそが神の栄光の実現に貢献する真の宗教であると考えた、真摯で良心的なコンフェッショナリストたちであった。コンフェッショナリズムの悲惨と、ポストコンフェッショナリズム(思想史における「啓蒙」)の歴史的意義を知るわれわれは、学問の世界で、現代版の愚かしい宗教戦争を繰り返す必要はないだろう。

スキナーとポーコックが、古きものを批判して刷新をもたらしたルターやカルヴァンの役割を担い、その後継者たちがライヴァルとともに対立を煽っているのであれば、ベヴィアやブローは、対立のなかで、共通するミニマムなルールを示したという意味でグロティウスやホブズの役割を果たしている。自分とは異なる方法論的立場・アプローチ、(サブ)ディシプリンに対する全稱的な攻撃的批判は、学問的批判とは似て非なるものであり、健全なアカデミズムを破壊するルール違反として、剽窃やデータ改ざんなどと並ぶ研究不正のひとつとそろそろみなしてもよいのではないだろうか。

ハードアカデミズムの擁護

第4は、方法論を語ることの意義にかかわる。本稿が、仮に、政治思想史方法論にかかわる一定の成果を示し、なんらかの学術的意義を有しているのであれば、そのことは、政治思想史研究においてもきちんとしたハードアカデミズムを維持すべきことを示唆していないだろうか。

スキナーであっても反応を余儀なくされたように、政治思想史研究は、政治学でありながら思想研究であり歴史研究であることから、その有意性(レレバンシー)や存在意義を問われることが多い。それゆえに、自覚的・意識的に一般・マスメディア向け、あるいは読書界・商業出版向けのソフトアカデミズムの活動に従事している研究者も少なくない。しかし、有意性をめぐる問いかけや、ソフトアカデミズムの活動が——現在の社会的・学術的状况のなかで——いかに重要で、いかに必要であるとしても、そればかりでは本末転倒ではないだろうか。

学問的方法論は、専門家集団が専門家集団のために論じる、専門性の高い研究領域である。定義上ソフトアカデミズムからはもっとも遠い学問的方法論に関して、日本語圏の政治思想史研究において長らく「知の空白」が続いてきたことは、政治思想史研究におけるハードアカデミズムの弱体化を示すものではないかとの危惧がぬぐえない。思想史研究では、テキスト解釈の補助的フレームワークとしてなんらかの通時的ナラティブが援用されることが多いが(たとえば共和主義研究はそうしたナラティブを提供してきた)、そうした通時的ナラティブの摂取や受容に目を向けても、同様の懸念が避けられない(たとえば、「穏健派啓蒙」や「宗教的啓蒙」「カトリック啓蒙」というナラティブはどれほど摂取されてきただろうか)。

方法論をめぐる議論(どのように研究するか)が、いつのまにか、有意性をめぐる議論(なぜ、なんのために研究するか)に横滑りしてそればかりになってはいなかっただろうか。有意性や社会的有用性への配慮が、研究そのものの健全な維持・発展を犠牲にしてはこなかっただろうか。方法論を自覚的に問うことが、学問が学問としてのすがたを維持するための自己点検活動の一部であるとすれば、方法論をめぐる「知の空白」はすみやかに脱することが望ましいはずである。

言及・引用した文献

- Ankersmit, F. R. (2000). Comments on Bevir's the logic of the history of ideas. *Rethinking History*, 4(3).
Bevir, M. (1992). The errors of linguistic contextualism. *History and Theory*, 31(3).
—— (1997). Mind and method in the history of ideas. *History and Theory*, 36(2).
—— (1999). *The logic of the history of ideas*. Cambridge University Press.

- (2001). Taking Holism Seriously, *Philosophical Books*, 43.
- (2002). Clarifications. *History of European Ideas*, 28(1-2).
- (2009). Contextualism: From modernist method to post-analytic historicism? *Journal of the Philosophy of History*, 3(3).
- (2011a). The logic of the history of ideas – then and now. *Intellectual History Review*, 21(1).
- (2011b). The contextual approach. In George Klosko (Ed.), *The Oxford handbook of the history of political philosophy*. Oxford University Press.
- (2011c). Histories of analytic political philosophy. *History of European Ideas*, 37(3).
- (2012a). In defence of historicism. *Journal of the Philosophy of History*, 6(1).
- (2012b). Post-analytic historicism. *Journal of the History of Ideas*, 73(4).
- Bevir, M., and Ankersmit, F. (2000). Exchanging ideas. *Rethinking History*, 4(3).
- Bevir, M., and Choi, N. (2015). Anglophone historicisms. *Journal of the Philosophy of History*, 9(3).
- Blau, A. (2011). Uncertainty and the history of ideas. *History and Theory*, 50(3).
- (2012). Anti-Strauss. *The Journal of Politics*, 74(1).
- (2015a). History of political thought as detective-work. *History of European Ideas*, 41(8).
- (2015b). The irrelevance of (Straussian) hermeneutics. In Winfried Schröder (Ed.), *Reading between the lines*. De Gruyter.
- Ed. (2017). *Methods in analytical political theory*. Cambridge University Press.
- ブレット A. (2002=2005) 「いま思想史とは何か」 岩井淳訳、キャナダイン D. (編) 『いま歴史とは何か』 (平田雅博ほか訳) ミネルヴァ書房.
- Burns, T. (2011). Interpreting and appropriating texts in the history of political thought: Quentin Skinner and poststructuralism. *Contemporary Political Theory*, 10(3).
- フリーデン M. (2008=2011) 「政治的に考えることと政治について考えること」、レオポルドほか 2008=2011.
- 古田徹也 (2013) 『それは私がしたことなのか：行為の哲学入門』 新曜社.
- グロッド P.、ルエット J.-F. (1999=2003) 『エッセイとは何か』 (下澤和義訳) 法政大学出版局.
- Hacker, A. (1954). Capital and carbuncles. *APSR*, 48(3).
- 半澤孝磨 (1988) 「政治思想史研究におけるテキストの自律性の問題 (1)」 『東京都立大学法学会雑誌』 29(1).
- (1990) 「政治思想史叙述のいくつかの型について」 『思想』 794.
- 保城広至 (2015) 『歴史から理論を創造する方法：社会科学と歴史学を統合する』 勁草書房.
- 今井耕介 (2017=2018) 『社会科学のためのデータ分析入門』 (粕谷祐子ほか訳) 岩波書店.
- 井上彰、田村哲樹 (2014) 『政治理論とは何か』 風行社.
- 犬塚元 (2014) 「政治理論研究の現在：「規範を論じるエッセイ」からの脱却」 『風のたより』 56.
- (2017) 「歴史の理論家としてのポーコック」 『思想』 1117.
- 伊藤武、砂原庸介、稗田健志、多湖淳 (2016) 「座談会 政治学をどう教えるか (上)」 『書齋の窓』 644.
- 加藤哲理 (2017) 「精神史から存在論へ：初期ハイデガーの思索の道から」 『政治思想研究』 17.
- Keane, J. (1988). More theses on the philosophy of history. In Skinner 1988.
- キング G.、コヘイン R.O.、ヴァーバ S. (1994=2004) 『社会科学のリサーチ・デザイン：定性的研究における科学的推論』 (真淵勝監訳) 勁草書房.
- Klosko, G. (2011). *The Oxford handbook of the history of political philosophy*. Oxford University Press.
- Koikkalainen, P. (2009). Peter Laslett and the contested concept of political philosophy. *History of Political Thought*, 30(2).
- (2011). Contextualist dilemmas. *History of European Ideas*, 37(3).
- (2015). The politics of contextualism. *Journal of the Philosophy of History*, 9(3).
- Koikkalainen, P., and Syrjämäki, S. (2002). Interview with Quentin Skinner, *Finnish Yearbook of Political Thought*, 6.
- Lamb, R. (2009). Recent developments in the thought of Quentin Skinner and the ambitions of contextualism. *Journal of the Philosophy of History*, 3(3).
- (2016). Historicism. In Bevir, M., and Rhodes, R. A. W. (Eds.), *Routledge handbook of interpretive political science*. Routledge.
- Lane, M. (2012). Doing our own thinking for ourselves: On Quentin Skinner's genealogical turn. *Journal of the History of Ideas*, 73(1).
- レオポルド D.、スティアーズ M. (編) (2008=2011) 『政治理論入門：方法とアプローチ』 (山岡龍一、松元雅和監訳) 慶應義塾大学出版会.
- Martin, J. (2002). The political logic of discourse: A neo-Gramscian view. *History of European Ideas*, 28(1-2).
- Martinich, A. P. (2012). A moderate logic of the history of ideas. *Journal of the History of Ideas*, 73(4).
- 松元雅和 (2015) 『応用政治哲学：方法論の探究』 風行社.
- McCullagh, C. B. (2002). The logic of the history of ideas. *Australasian Journal of Philosophy*, 80(1).

- Megill, A. (2000). Imagining the history of ideas. *Rethinking History*, 4(3).
- 森直人 (2002) 「Q.スキナーとJ.G.A.ポーコック：方法論的比較」『調査と研究』25.
- 野村康 (2017) 『社会科学の考え方：認識論、リサーチ・デザイン、手法』名古屋大学出版会.
- 小野紀明 (1988) 『精神史としての政治思想史』行人社.
- (1994) 『現象学と政治』行人社.
- Palonen, K. (2000). Logic or rhetoric in the history of political thought?. *Rethinking History*, 4(3).
- Pippin, R. B. (2001). Review: The logic of the history of ideas. *Mind*, 110(437).
- Richter, M. (1990). Reconstructing the history of political languages. *History and Theory*, 29(1).
- Richter, W. L. (2009). *Approaches to political thought*. Rowman & Littlefield Publishers.
- ローティ R. (1984=1999) 『連帯と自由の哲学』(富田恭彦訳) 岩波書店.
- (1989=2000) 『偶然性・アイロニー・連帯』(齋藤純一、山岡龍一、大川正彦訳) 岩波書店.
- (1992=2013) 「プラグマティストの歩み」柳谷啓子訳、コリーニ S. (編) 『エーコの読みと深読み』(柳谷啓子ほか訳) 岩波書店.
- 佐々木毅 (1981) 「政治思想史の方法と解釈：Q.スキナーをめぐる」『國家學會雑誌』94(7).
- 佐藤正志 (1990) 「クエンティン・スキナー」、小笠原弘親ほか『政治思想史の方法』早稲田大学出版部.
- 関口正司 (1995) 「コンテクストを閉じるということ：クエンティン・スキナーと政治思想史」『法政研究』61(3).
- (2015) 「クエンティン・スキナーの政治思想史論をふりかえる」『法政研究』81(4).
- Skinner, Q. (1966). The limits of historical explanations. *Philosophy*, 41(157).
- (1975). Hermeneutics and the role of history. *New Literary History*, 7(1).
- スキナー-Q. (1985=1988) 「序 グランドセオリーの復権」加藤尚武訳、スキナー (編) 『グランドセオリーの復権』(加藤尚武ほか訳) 産業図書.
- Skinner, Q. (1988). *Meaning and context : Quentin Skinner and his critics*. Tully J. (Ed.). Polity.
- スキナー-Q. (1990) 『思想史とはなにか：意味とコンテクスト』(半澤孝磨、加藤節編訳) 岩波書店.
- Skinner, Q. (1998). *Liberty before liberalism*. Cambridge University Press.
- (2001). The rise of, challenge to and prospects for a Collingwoodian approach to the history of political thought. In Castiglione, D. and Hampsher-Monk, I. (Eds.). *The history of political thought in national context*. Cambridge University Press.
- (2002). *Visions of Politics vol. I. Regarding method*. Cambridge University Press.
- (2009). A genealogy of the modern state. *Proceedings of the British academy*, 162.
- Skodo, A. (2009). Post-analytic philosophy of history. *Journal of the Philosophy of History*, 3(3).
- (2013). Analytical philosophy and the philosophy of intellectual history. *Journal of the Philosophy of History*, 7(2).
- Stanton, T. (2011). Logic, language and legitimation in the history of ideas. *Intellectual History Review*, 21(1).
- Steinberger, P. J. (2009). Analysis and history of political thought. *APSR*, 103(1).
- Stern, R. (2002). History, meaning, and interpretation: A critical response to Bevir. *History of European Ideas*, 28(1-2).
- Stuurman, S. (2000). The canon of the history of political thought. *History and Theory*, 39(2).
- Syrjämäki, S. (2011). Mark Bevir on Skinner and the 'Myth of coherence'. *Intellectual History Review*, 21(1).
- 田村哲樹、松元雅和、乙部延剛、山崎望 (2017) 『ここから始める政治理論』有斐閣.
- 塚田富治 (1994) 「思想史の方法をめぐる：スキナリアン宣言」『一橋論叢』111(3).
- 堤林剣 (1999) 「ケンブリッジ・パラダイムの批判的継承の可能性に関する一考察 (一)」『法學研究』72(11).
- (2000) 「ケンブリッジ・パラダイムの批判的継承の可能性に関する一考察 (二・完)」『法學研究』73(3).
- Whatmore, R. (2016). *What is intellectual history?* Polity Press.
- Wootton, D. (2003), The Hard Look Back. *Times Literary Supplement*, 4 March 2003.
- 安武真隆 (2014) 「政治理論と政治思想史：J・G・A・ポーコックと「ケンブリッジ学派」、井上ほか」2014
- Young, B. (2002). The tyranny of the definite article. *History of European Ideas*, 28(1-2).